

いつの日か、流離いの

赤木健介

ぼくの記憶は、三歳にはじまる。言葉も拙く、他人との区別も明確ではない。世界との境界は曖昧で、いまだぼくになりきれないものとして。

季節はわからない。暑さ寒さの記憶もない。母に抱かれ格子の外から、白熱電灯に照らされた、明るい部屋を見つめていた。そして、母の暖かい肌のぬくもりを感じていた。そう思いたい。

格子の向こうから、厚化粧の女が近づいてきた。

「まあ、可愛い坊や。瞳が大きくて綺麗、唇も真っ赤で透きとおるようね。まるで女の子。お名前は？」

その女はぼくを見つめながらたずねた。厚化粧の匂いが鼻につく。真っ赤な唇から漏れる生暖かい口臭が、ぼくの目の辺りにまとわりついた。

ぼくはまだ、年齢と名前の区別が明確ではなかった。とつさに年齢が口をついて出た。

「三歳」

「違う！ 名前。な、ま、え。ほんと、お前はオヤジの血統だよ。血統！」

母は蔑むような口調と表情で、ぼくの間違いを指摘し、責めた。そのとき母は、ぼくの裡に、父を見ていたのだ。女が問い直した。

「三歳ね、お名前は？」

ぼくの意識は朦朧としていた。何も答えられなかった。返答も聞かず、女の興味は、もうぼくから離れていた。そして母にたずねた。

「何番目の子？」

「七番目、三十九歳で産んだの」

「じゃあ、一番下の子は？」

「長女が見ているの」

「ああ、優秀でしっかり者だから安心よね」

「ええ」

「でも大変ね。からだ大丈夫？」

「ええ、脳溢血といっても軽いから大丈夫」

「運がよかったのよ。気をつけないとね」

女は眉をひそめ、不安げな表情で言った。

「そうね」

考え込むように母は答えた。

「いい物があればまたお願いするわ」

女はそういうと、欄間の奥の部屋に戻って行った。襖の陰から現れた毛深い男の手が、やにわに女の腰を抱いて引きずりこんだ。嬌声と笑いが部屋の奥ではずんだ。母とぼくは、そそくさとその場を離れた。

母はめずらしくぼくを連れ出し、質屋の帰りに行商の得意先をのぞいた。不要な衣類を質入し、わずかな金を手にしていたので、いつになく機嫌がよかった。でもそれ以来、ぼくは母の笑顔を見ることがない。ぼくを嘲るような笑顔以外の。

母に蔑まれていた父は、網走の呼人地区では、評判のよい優秀な林檎栽培技師だった。近所の人たちも、父の仕事ぶりと能力には敬意を表していた。ところが、ぼくが生まれる少し前あたりから、この地区の栽培が下火になりはじめた。それと歩調をあわせるようにして、父は博打にのめり込んでいった。借金を作っては、家の物を持ち出すようになった。収入はほとんど途絶え、しかたなく母は内職をし、行商に出ては家計を支えた。母が父を軽蔑し、罵倒してやまないのは、無理のないことだった。生活は苦しく、借金取りは毎日のようにやってきた。行商で留守の母に代わって、対応は長女の役割だった。男たちの恫喝からかばうために、ぼくたちを奥の部屋に隠した。玄関口の狭い板の間に座った長女は、首をうな垂れ、その背はいつも小刻

みに震えていた。太り気味のからだ小さく見えた。

その状況はしばらく続いたが、結局、祖父から引き継いだ、いかにも貧相で崩れ落ちそうな小さな家屋と、その宅地が借金の返済に充てられた。父がつくった借金に一応の決着をつけ、母は家族を連れ、呼人を出た。

家族は網走港の近くに寄り住んだ。冬の海はどんよりとした雲に覆われ、黒い波濤が荒れ狂っていた。町全体を凍らせるほどの冷たい風が、不気味な唸りをあげていた。そんな夜は恐ろしさのあまり、安眠できなかった。でも、時たまの晴れた碧い空の下に、白くまぶしく輝く流水が、どこまでも遠く浮かんでるとき、凜として静かな海は寂しく美しかった。白く輝く世界と、黒い波、不気味な海鳴りが記憶にある。

相変わらず、母の行商が生活を支えていた。家にはいない母に代わり、勤めを辞めていた長女が、ぼくたちの面倒をみた。長女の退職理由は知らない。ただその頃の、部屋の片隅で力なく座り、焦点の定まらない目で、ぼんやりと宙を見ていた長女の姿が、いつまでも脳裏を離れない。

ある時期までの長女の想い出は、いつもぼくを暖かくする。長女に背負われ、海に浮かぶ帽子のような小島をのんびりと眺めた。波打ち際には、貝殻が静かにたゆたつてい

た。白く波立った海水が沖に引き上げると、きれいに整えられた砂浜が現れる。そしてまた、押し寄せる海水に隠れる。海水で洗われた貝殻を拾い、何度も海に投げてみる。いくら投げて、飽きることはなかった。あのままと止まっていたら、そんなありえない夢想がぼくを幸せに、またその喪失の不幸へと誘う。のどかな春の海は、潮の香りまで暖かい。

長女におぶさつて、山手の坂道を上った記憶がある。明るい陽射しと穏やかな海鳴り、潮風の香り、長女の背の暖かき、伝わってくる鼓動、髪や首筋から漂いである匂い、心地よい酩酊感に浸った。それから間もなくして、二十二歳の長女は、丘の上の白い病院へ姿を消した。

港町の生活になった頃、家族が一人増えた。高校生の長男が女友達を妊娠させ、ぼくの姪になる女の子を置いて、家出してしまったからだ。母は仕方なくその子を引き取った。狭い家ますます窮屈になった。そして、女たちの愛情は、すぐ下の妹とその姪に集まった。ぼくはただ厄介な手間のかかる困った餓鬼にすぎなくなった。勝手な妄想ではない。母から実際に、厄介者と罵られて育ったからだ。

母や長女が留守のある日、部屋の中で、ぼくは妹と追いかけて遊んでいた。妹を背後から捕まえようとして、前のめりに転び、ストーブで左の頬を火傷した。この

ささいな傷が、後日ぼくを苦しめることになるとは思ひもよらなかった。他人はどんな些末なことからも、人を傷つけ、迫害する理由を見つけない。

母はぼくを叱った。

「妹が怪我をしたらどうする。オヤジに似てろくでなしで厄介者だ。本当にオヤジの血統だ」

母はいつもそう言つて、ぼくを叱責した。嫌っていた父の面影を、ぼくに重ねていたのだ。ぼくの怪我への配慮はなかった。何かを頬に張り付けられ、しばらく放置されていたのを覚えている。傷が残った。

寒い日には、頭まで布団の中にすべりこみ、体温と吐息で暖をとった。無意識に身体が覚えた習慣だった。暖かいだけでなく、とても落ち着いた。

雪は溶けていたが、まだ寒さの名残ある春浅い夜。頭までかぶった布団の中で、眠りが浅くなった頃、母と近所に住む老女の会話が聞こえてきた。

「呼人の外れで、水芭蕉の中に倒れとつた。喉のところ、かきむしつて傷だらけだった」

母がため息交じりに言った。

「知つた所で死のうと思つのかね。呼人かね。よほど苦しかつたのかね。彼氏と子供のことだろうね」

老女は低い声でつぶやいた。

「うん、オヤジは博打に手をだして、借金だらけで行方不明。どんな悪いことをしているかもしれん。大勢の子の面倒は見ないといかん。彼氏もその親も、そんな家見れば、逃げるのも当然よ」

あきらめ口調で母が言う。

「それで、もう身体は大丈夫かね。赤ん坊、墮胎しとるしね」

老女が長女の身体を氣遣つた。

「うん、頭は変になつてはいるけど、身体は調子よく、大丈夫」

母がきつぱり答えた。

「そうかね、早く良くなればいいけどね」

老女はまだ不安げだった。

「病院は網走ね」

老女が念を押した。

「そう」

母は素つ気なく答えた。

長女の姿がしばらく見えなかったが、二人の会話で様子が知れた。呼人の外れで、水芭蕉の中のをた打ち回る長女の姿が、脳裏に浮かぶようになった。長女の無事を確認するために、その姿を執拗に、何度も何度も想い返し、確認しないと気がすまなくなつた。それをいくら繰り返したところで、何の満足も得られなかったが、やめられなかつた。

た。ぼくは長女になり、苦しみ、のた打ち回る。長女がぼくで、ぼくが長女。苦しみの一体感を味わうまで、果てしなく繰り返すしかない、病的な習癖が身についた。

長女の不在は長引いた。家族の世話に時間をとられた母は、行商に出る機会が少なくなつた。当然家計は以前に増して苦しくなつた。そして、切羽詰つた母は、ぼくたちを捨てた。おそらくは、著しい苦悶もなく。

昭和二十九年の秋、母は十七歳の次女と三歳の妹、それに、長男の二歳になつた子を連れ、北津軽の板柳町、母の生地に戻つた。次女が母代わりで幼い二人の面倒を見る。母が父の代わりに生計を立て、余力があれば、われわれへの仕送りに回す。そう、残されたぼくたちの生命を維持するための、日々の糧としての仕送り。網走に残されたのは、十四歳の三女、十二歳の次男、九歳の三男と五歳のぼく。まだ一人前ではないが、それぞれ身の回りのことは自分でできる。力を合わせれば、何とか生きていけるはず。無知で薄情な、母の見事な采配ぶりだ。

母が青森に発つ日、殺風景な無人の駅には、冬の訪れを予兆させる、冷たい風が吹いていた。漠然とした不安に、胸が浮き沈みするようにざわついていた。車中の人となつた母は、ホームに残つたぼくたちを無言で見つめながら、確かに、悲しみを押し殺すために、わざと険しい表情をつ

くつていた。そう思いたい。自分に言い聞かせるように、ぼくは何度も何度もその表情を思い浮かべてみる。

汽車の窓越しに母が言う。

「冬が来て雪になると、網走では仕事ができん。青森へ働きに行く。食べ物には家にいくら置いてある。あとは近所の人かオヤジにもらえ」

母がそう言うのと、次男が強い口調で言った。

「カネを早く送ってくれ。生きていけない」

汽車は荒れ果てた大地を、奇妙な軋み音を発しながら、ゆつくりと動き出した。黒煙が身体を暖かく撫で、視界を遮った刹那、一瞬の風が煙を吹き払った。黒煙が目に入ったためか、急に目頭が熱くなった。無意識のうちに、ぼくは汽車とともに走り出した。いくら必死に追いかけても、汽車には追いつけなかった。汽車は徐々に速度を増し、ぼくを引き離していった。眼の前はかすみ、涙と入り混じった鼻水が、よだれと混ざり合って、唇の端を通って流れ落ちた。激しい息遣いと苦しい動悸のなから、ぼくは声を絞り出した。

「かあちゃん、ぼくもつれていってくれ。かあ、ちゃん」
一瞬、母が笑った。その意味を知りたい。いつもぼくは思う。

「ばかだね！ どこまで追ってくるの。あんたを育てたつて、ラジオ一台買えやしないよ」

汽車は黒煙を撒き散らしながら、小さくなって消えていった。三男は泣き続け、母への愛情とその喪失を全身で表していた。ぼくはただ、虚ろな気分、無感動に兄を見つめ続けるだけだった。

取り残されたぼくたちは、どうしていたのだろうか。そう、中学二年の三女は新聞配達店で仕事をもらい、早朝と夕方各百軒程度の配達区域を受け持っていた。小学六年の次男と三年生の三男はいつも二人で、町で鉄くずやさびた釘などを拾っていた。ぼくは港まで出かけ、水揚げの際に落ちこぼれ、見捨てられた小魚を拾った。次男はゴミ箱から捨てられた羊羹を拾い、自分だけ食べていた。でも、三男は決して口にはしなかった。頑なに、何かに耐え続けているように見えた。その男らしさは、寒々とした世界に独り屹立していた。ぼくの口に羊羹が入ることはなかった。また次男は竹輪工場に行つては職人に竹輪をもらつたりしていたが、どうしても貰えなかったときは、人目を忍んで盗むことさえあった。そんな時もやはり、三男は毅然として、加担しなかった。

「走れ！」

次男の掛け声に必死で駆け、ある店の前から逃げた記憶がある。次男は店先から盗んだ食べ物、必死で抱え込んでいた。かっぱらいの戦利品は、キャラメルや一文菓子だ

母が実際にそう言ったと聞いた。まんざら嘘でもなさそうだ。母は電化製品が好きで、憧れで、最新の製品を買うのが夢だった。自分の夢を叶えるためには、ぼくたちは邪魔だったのだ。まさかそんな理由で、と他人は思うだろう。でも、人間などそれ程度のものだとも思う。特に母は。

ホームは途切れていた。激しい動悸と痙攣寸前の筋肉がぼくを動けなくした。もう走れない。大きく息をしながら、ぼくは立ち尽くした。小さくなっていく汽車を、呆然と見送るしかなかった。身体中から血の気が引き、脱力感がぼくを襲った。なぜか、この時を予測していたような気がした。いつも抱いていた漠然とした不安が現実になった。

「俺たちは捨てられた」

冷たい風に乗って、三男の泣き声が、ぼくの背中を突いた。

「捨てられた？」

一瞬の後、ぼくはやつと自分を意識した。

「捨てられた？ 俺たちは捨てられた？」

母の重い荷物を運ぶのを手伝っただけなのに。これが捨てられたということ？ 何度も、何度も反芻した。言葉と実感が一体にならねば気が済まなかった。捨てられたという実感が、なんとしても必要だった。さもないと、自分がこの世界にいないような気がする。地の底への転落、不幸の実感が必要だった。

つた。兄貴たちの十分の一程度のおこぼれを、貪り食った。すきつ腹にはご馳走すぎた。それでもまだ食い足りなかった。

町を歩くと、大人たちの好奇の眼が疎ましかった。人に見られるのは嫌いだ。目つきが怖かった。心の中で見透かされるように思えた。ぼくだけは、よく近所の大人や少年たちに棒切れで殴られた。理不尽で、理由がわからなかった。薄汚さが原因だったのか、あるいは浮浪者と見えていたのか。ぼくに触れた者は必ず不快感をあらわにした。あまつさえ、汚物を払い落とすかのように、両手を執拗に払った。つばを吐きかける者さえいた。ぼくは不浄な生き物扱いだった。

それでも、ぼくたちはまだ生きていた。寒さと飢えで衰弱は免れなかったが。いつも空腹で、水ばかり飲んでいて身体が冷たく、自分の吐く息で暖をとるしかなかった。

寒さと水ばかりのせい、ほとんど毎晩、ぼくは寝小便をした。夢うつつの中、暗闇から強烈な力が突然飛び出して、激しくぼくを打ちのめした。激痛に声も出なかった。

次男はまるでぬいぐるみを踏みつぶすように、ぼくを殴り足蹴にした。鼻血や呼吸困難の苦痛と吐き気で、何度も死ぬかと思つた。濡れた布団ごと、寒い戸外に放り出される日々が続いた。冷たい布団をかぶり、寒さに震え、家の中に入れてくれと哀願した。見かねた近所の人の介添えがな

ければ、とつくに命はなかつただろう。やつとの思いで、屋内に入れてもらえた時、火の気のない部屋の暖かさが嬉しかった。もう二度と寝小便はしないと誓い、夜通し寝まいた。でも、挫折は繰り返された。治癒はほど遠かった。ホルモンの異常が原因だった。痛さと寒さはもう二度と味わいたくなかったが、仮借ない闇の力に怯えながら、ただ耐えるしかなかった。抗する力の尽き果てる時、なぜか、うつろな無感動、いやむしろ恍惚感とも呼べる感覚が、ぼくを支配するようになった。毎晩のごとく、強烈な痛みと放心状態がぼくを襲った。闇から飛び出す黒く大きな影が、何度も何度もぼくを不意打ちにした。身内とは、次男とは、鬼のことだ。

ぼくたちは確実に衰弱していった。もはや誰の眼にも、いずれ力尽きるように映っただろう。誰かが福祉事務所に通報した。あつけなく、ぼくたちは青森に住む母の家に引き取られた。なぜ母は通報しなかつたのだろう。結局は迎えにこなければならなかつたのに。母は世の中の仕組みを知らなかつた。無知は罪に違いない。

町は林檎の香りに溢れていた。この美しい地球の一角に、ほんの一粒ほどの、かぐわしく香る町で育った。そう語ればそれだけで、一時的にせよ樂園で生きたではないか、と他人は言うかもしれない。たしかに、香りの印象が強く残

生が現れた。

「あなた、この幼稚園に来ればいいのに。お家の人に話せばいいわ。必ず入園できるから」

笑顔で、確信的に言う。

「お母さんに言つてあげる」

少女も後押しするように言う。

ぼくは返事ができなかつた。経済的な理由を考慮したのではない。そんな判断力はいまだ持ち合わせてはいなかつた。心情的に無理だつたのだ。門扉の中で大勢の子供たちが群れ遊ぶ光景に、ぼくは怖気づいた。その中に溶け込める勇気はなかつた。見知らぬ恐ろしい小さな悪魔たちが走り回つていたからだ。対面で誰かと話すだけでも苦しい思いがしていた。ぼくはその場を逃げるように駆け出した。息を切らせて家の近くまで帰つてくると、しばらくして少女が追いついてきた。

「幼稚園に行くといいいから、神様が見えるようになるから」

「神様？」

「そう、眼をつぶつて」

「ぼくは言いなりに眼を閉じた。」

「なにか見える？」

「真つ暗で何も見えない。星のようなものがきらきらしている」

っている。でもぼくは、この町の真の住民ではない。いや、どの町の住民でもない。世界がぼくを排斥していた。だから世界を考慮する必要がある。ぼくは自分の裡だけで生きていた。他人に思いを馳せることはできなかった。

子供たちだけの厳冬の網走生活に比べると、青森の生活は楽だった。板柳駅のすぐ近く、通称「マーケット」と呼ばれる飲食街の、貧相な棟割長屋にぼくたちは棲んだ。食欲と性欲と金、人間の欲望がネオンの下に底流した町。

隣家とは、ベニヤ板一枚で仕切られていた。ぼくはその薄い壁にあげられた穴から、隣家をよく覗いた。悪気などない。穴から人が見え、さまざまな生き様を見るのが楽しかった。自分の家にはない、おいしそうな食物や、楽しんで珍らしい歓楽が興味深かつた。

隣家の男女は、見たこともない贅沢な食事を食らい、絡み合い、不作法で下品な音をたてて貪りあい、無遠慮に快樂の呻き声を漏らした。そんな行為に掻き立てる衝動が、まだ理解できなかつた。原始的な欲情の路地裏、居並ぶ狂乱の館、それがぼくの棲む町だった。

同年代の子供たちは、誰もが近くのキリスト教系幼稚園に通つていた。ある日、その幼稚園に通う、近所に住む二歳年長の少女が、ぼくをその幼稚園に連れて行つた。ぼくは門扉の外に待たされた。しばらくすると髪の毛の長い女の先

「そう、神様は見えない？」

「何も見えない」

「神様はね、いると思えば見えるのよ。いないと思えば見えます。先生が言っていました」

「ふうん」

「いつか、わかるわ」

少女はぼくの説得を諦めた。神様がほんとうにいると思えば、どれほど救われただろう。違った運命に出会えたかもしれない。

「あたし、帰るね」

「そういい残して、少女は自宅の玄関をくぐつた。」

仮に経済的余裕から入園できても、他人に溶け込めない気性では、結局は退園せざるをえなかつただろう。生涯、集団生活には馴染めなかつた。家族から、地域から、あらゆる集団から、世界から脱落して、疎まれて生きるのが習性になつた。

次男には相変わらず殴られていたが、なぜかはよくわからない。三男に言わせると、ぼくの衣服はめつたに洗濯されないうえに、寝間着も同じ物で、ひどく汚れ、悪臭さえ発していた。その袖口は蓄膿症の鼻汁で汚れ、乾いてはまた汚れ、てらてらと光つていた。おまけに、滅多に洗われない髪は、頭皮の油や汚れで固まり、逆立っていた。ぼく

は乞食お化けと呼ばれた。そんなぼくを、次男は誰にも見られたくなかった。にもかかわらず、次男が参加している学芸会に、その出入り禁止命令を無視して、ぼくは薄汚く惨めな姿を現した。それが次男の誇りを傷つけた。次男なりに、自分の貧しさをひた隠しにしていたのだ。貧しい者たちに対する、差別と偏見、蔑視に次男も傷ついていた。誤解してはいけない。富者が貧者を侮蔑するのではない。貧者が貧者を憎むのだ。蔑まれる者は蔑む者を探す。ぼくの薄汚い姿は、次男を他人からの侮蔑の視線に曝した。次男はぼくを殴り続けることで、他者の蔑むようなまなざしに復讐していた。母の帰りを心待ちにしながら、ぼくは痛みと恐怖に耐え続けた。みぞおちを蹴られて気絶したこともあった。みぞおちへの衝撃は、呼吸困難を招く。息がでさずに、何度も何度もた打ち回った。あの時死ねばよかった。母が帰宅し、慰めを期待していると、母はいつも同じ態度と言葉でぼくに冷たく当たった。

「ほら、また泣いている。うっとうしい我鬼だよ」

母は泣いている理由など、まったく聞かなかった。ぼくに関心がなかったのだ。なぜ泣くのかと、問われるだけで癒されただろう。それどころか、次男の暴力をまったく咎めなかった。むしろ、ぼくへの威嚇に利用していた。ぼくを殴るように指図さえしていた。

ならば三男は、ぼくに対してどのような態度で接してい

った。

とにかく歩いた。目的地などない。方角も分らない。虚ろに、歩くだけ。この家以外なら、どこでもよかった。いや、やはり長女のところだった。

春の夜は、昼の暖かさとは違い、けっこう冷え込んだ。疲労と空腹、気温の低下が歩く速度を落とした。途中の休憩回数が増えた。時間は分らない。いや、時間の意識などなかった。闇の中に、小さく動く灯火がいくつか見えるだけだった。急に怖くなった。得体の知れない不安が、ぼくのころと身体を押し潰そうとした。ぼくは力なくしやがみこんだ。そのまま動けなくなった。しばらくの後、誰かが近づいてきた。帽子を被った二つの大きな黒い影。重々しい足音は、ぼくの前で止まった。

「やっと見つけたぞ」

闇の底から湧き上がるような重苦しい声、まぶしい懐中電灯がぼくを照らした。眼がくらんで何も見えない。眼を細め、視線を斜めにして、恐る恐る見上げた。まぶしい光の向に、帽子と制服の、黒く大きい、二人の警察官の姿がぼんやりと見えた。顔はよくわからなかった。突然、一人がぼくを抱いた。二人の警官がぼくを確保した。ぼくは訳もわからず、恐ろしさに震えていた。恐怖はいつも闇の中からやってくる。

たのだろうか。確かに暴力は振るわなかったが、言葉でさんざんぼくを愚弄し続けていた。

「シヨンベントレ、キチガイ、サポリボウズ」

等々だった。この三男は後年、ぼくの目標にもなったが、あまり情の湧かない相手だった。母のように距離を置き、いつもぼくを無視したからだ。困ったときなどは、むしろ暴力をふるう次男に会いたくなかった。理由はわからない。こんな中で、ぼくの鬱憤はどうなったのだろうか。そう、ことあるたびにぼくは妹を叩いた。

「お前はあのオヤジの血統だ。ろくでなしオヤジのところへ行つてしまえ」

母はいつものように、ぼくと父とを重ねて叱るだけだった。問い詰めることもなく、ぼくに冷たい態度で接した。

ある夕方、無性に腹が空いていた。そうかと言って、おやつなど家にあるはずもなかった。そして、ちいさな硝子瓶に保存されていた紅生姜の塊を、いつものように平らげた。辛いけど、急に元気が出たように思えた。ぼくは家出した。小学生になる一年前だ。もちろん計画性などありはしない。衝動的に、単純に家を出たのだ。兄たちから、母から、家庭から、狭いこの町から。その時のぼくは、他どのような世界を見ていたのだろうか。何も見てはいなかった。想像力で思い描くほどの、確実な知識はなにもな

昭和三十一年の四月、小学生になった。入学式の日、母と一緒にいなかった。

前の晩、いつものように寝小便をしてしまった。着替えがなかったで、下着なしでズボンだけをはいていた。他人にはわからない。でも恥は、誰が知らなくても、ぼくだけは知っている。

兄たちのお下がり、擦り切れた制服が与えられた。穴の開いた衣服を手で隠しながら、入学式に参加するしかなかった。恥ずかしかつた。惨めな自分の姿を、少しでも隠そうと必死だった。その上、幼稚園に通っていなかったで、小学校という見知らぬ集団生活への不安も手伝い、重苦しい気持ちでいっぱいだった。

近所の家に、ぼくと同年齢の女子がいた。入学式当日、そろって学校に向いたことは覚えていいる。その女子は、しばらく黙ってぼくを見つめていた。そして決して近寄ろうとはしなかった。校門をくぐるとき、手をつなぐようにと、学校の誰かが促したが、その女子は手を後ろに隠したまま、前に出そうとはしなかった。その嫌悪と拒否の目つきは、以後何かにつけ、誰もがぼくに向けた意志表示と重なる鮮明な記憶だ。

新入生全員が講堂に入れられ、パイプ椅子に座らされた。母親たちの集団はその後立ち、ぼくたちを参観していた。先生と思われる大人たちの、意味の分らない話がしばらく

だと思った。黙って持ち去った。自転車は河原で保管した。まだ自転車に乗れないぼくは、暇を見つけては、町の至るところで乗りこなす練習に耽った。何度も何度も倒れながら練習した。

数日後、ぼくは警察官たちに連行された。そこがどこだったのか、そう、交番だ。おそろしい大人、警察官たちは盗んだだろうと恫喝した。でも、ぼくは拾ったのだ。断じて盗んだのではない。でもやはり、ひよつとすると、そんなのかも知れない。もうぼくには判断がつかなかった。警察官は、盗みを認めれば、無罪放免にして家に帰してやる、とぼくを威嚇し、脅しつづけた。怖い場所から解放されるためには、盗んだと認めなければならなかった。ついにぼくは認めた。この世の者はいつもぼくを威嚇し、敵対すべきものとして現れる。常に身構え、不安におびえる姿勢が身についた。

冬になった。寒さが厳しくなるにつれ、ますます外に出るのが嫌になった。学校は今日も休んだ。

「学校へ行きなさい」

仕事に出る前の母が叱った。

「網走の姉さんのところへ行く」

ぼくはきつぱりと言つて、家を飛び出した。二回目の家出だった。大人たちに紛れ、気がつけば青函連絡船で函館

ようもなく愚かで善人の、惨めで憐れな人。そんな父が可哀想で、愛おしかった。

数日後、いつものようにぼくは、映画館の前にいた。入り口の上部には、横長の大きな看板が掲げられ、両脇には立て看板が置かれていた。横長の看板には実際の映画の一場面が描かれていた。大海原と白い雲を背景に、登場人物が活躍するさまが描かれ、魅力的な異国情緒がぼくを仮象の世界へ誘惑した。それを見つめていると、夢と現実の区別がつかなくなった。この世と違う世界にいるときだけが、ぼくを幸福な気持ちにさせた。両脇の立て看板には、外国人の男性主人公や女優、脇役の登場人物たちが描かれていた。こんな映画の世界へいつか行つてみたい。そんな気持ちがこの世の苦痛から、ぼくを守り支えていた。

「元氣か？」

不意の穏やかな声に振り向くと、烏打帽をかぶり、無精髭の伸びた父がいた。ぼくは一瞬後ずさりした。黒く腫上がった顔が無理やり笑っていた。ぼくに媚を売っているようにも見えた。ぼくは沈黙した。

「映画、見たいのか？」

父はポケットから百円を取り出し、ぼくに渡そうとした。しかし父と接触しないことを、次男と三男は命じていた。ぼくは父に背を向け、無言で一目散に逃げ出した。そして

にいた。金もなく、知識もないぼくが、どのようにしてここまで行けたのか。誰もぼくに関心を払わなかったから、人ごみに流されるようにして、目的地に着けたのだ。でも結局は、その函館で捕捉された。母が迎えに来た。きつい言葉と態度で放り出しながら、なぜ迎えになど来るのだろうか。

その時、母は近くの魚市場へぼくを連れて行き、赤まんまのおにぎりを食わしてくれた。ほんのり暖かくて、とてもおいしくて、うれしくて、母が優しく思えた。それ以降、不思議なことに寝小便がやんだ。それからしばらくは、網走へ行きたいとは思わなくなった。

九歳になった。学校が退けて、河原で暇をつぶしてから帰宅すると、怒声と鈍く重い音、激しい息づかいが交錯していた。久々に家に戻った父を、次男と三男が鉄拳をふるい、足蹴にし、木刀で激しく打ちすえていたのだ。父は目じりや額から激しく出血し、鼻血と涎とを垂らしながら、両手で自分の頭をかばうようにして、許しを乞うていた。

息子たちの暴力に抵抗することもなく、反撃もしなかった。なすがままに、身をまかせていた。恐怖のあまりその場に呆然と立ちつくすしかなかった。こんな家には居られない。その頃から、母が言い募る、優秀だが身を持ち崩した、悪い父の印象が徐々に崩れ始めた。むしろ気弱で、どうし

振り返った。いまだに思い出す、背を丸めて歩く父の後ろ姿。悲しげに見えた。この時以来、父を見ることはない。

それに、失われて今はない、父と二人だけで写った古い写真。ぼくは父の右腕に抱かれ、無邪気で無垢な満面の笑みを浮かべていた。父は左手に大きく赤い林檎をもち、それをぼくの顔に寄せ、大きさを比べて笑っていた。父は嬉しそうにぼくを見つめていた。父と子の情愛に満ち溢れた幸福な光景だった。父もぼくも幸せだったと思いたい。父については、優しいという記憶しかない。いつか一緒に暮らしたい。

その後、父の姿が、狭い部屋の片隅に捨て置かれた木刀を通して、ぼくの脳裏に頻繁に現れるようになった。木刀は血を吸って黒ずんでいた。少し欠けており、またかなりへこんでもいた。もちろん父を殴打したための傷ではない。そんなに傷つけば、父はとうに死んでいただろう。そんな木刀のへこみや傷、吸った血の黒ずみが、不在の父を浮かび上がらせるのだ。へこみには父の頭部が合致する。黒い血痕には血まみれの父の顔面が、鼻血が浮かび上がる。現実には誰と話していようが、どんな出来事に向き合っていようが、血まみれの父の姿は脳裏から消えなかった。ぼくはこの木刀を愛玩した。へこみや傷、黒い血痕がいとおしかった。まるでそれは、父の化身そのものだった。これがあ

れば、これさえあれば安心していられる。護身用の木刀だった。

そんなぼくに、兄たちはいつも言った。

「おまえもこれでオヤジをやるのか」

ぼくはいつも無言でうなずいた。ほんとうの気持ちを話せるほど、まだ肉体的にも精神的にも成長していなかった兄たちがまたまた怖かった。いずれ対等に話せる時がくるだろうか。

家族が食事をする間、部屋の隅でその光景をじっと見つめながら、静かに待つ。皆が寝静まつてから、わずかに残された物を独り食べた。食べられない、とにかく食べたいもつと食べたい、それだけのこと。

出来るだけ家にいたくなかった。ぼくは駅に逃げ出す。板柳駅の荷物置場には、林檎の空箱や肥料袋が置かれていた。それらを積み上げて隠れ家をつくる。楽しくて、暖かくて、落ち着けた。誰もいない。自分だけの世界。殴られもせず、独りで安穩にくつろげる城。駅には夢がある。網走につながっている。長女にたどり着ける。希望の場所だでも早い時間帯だと、駅員に見つかって荷物置場から追い出された。そんな時は、マーケット近くのバス駐車場へ行く。仕事を終えた何台ものバスが、静かに休んでいる。バスの下に藎ヒヨドリを敷いて休む。狭い場所は安心して落ち着ける。

あくまで、情愛の発露から生じたものだが、九歳にして、ぼくは囚われ人の烙印を額に刻まれた。しかも、近所の連中が見つめる中での強制連行だった。町の誰もが知っている、恥ずべき人間になった。わずかに九歳の留置場の住人。

警察官はぼくに食事をさせなかった。自分が食べていた大豆を、ぼくに向かつて勢いよく吹きかけた。机を激しく叩き、熱い電気スタンドをぼくの顔に向け、大声で怒鳴った。盗む気はまったくなかったのに、盗んだと決めつけられ、恫喝されると、怖くて認めてしまう。そうなのだとなん得してしまふ。大人たちの決めつけに反抗できなかった。彼らは偉大な裁判官だった。屈服するしかなかった。あの時、誰かが弁護してくれたら、世間を怨む気持ちが少しは薄れただろうに。世間がぼくを犯罪者に仕立て上げる。ぼくは認めた。家出はもちろん、盗みを。逆らえるはずがない。否認などできようもなかった。

威嚇すれば、人間を改造できると、単純に思っていたのだ。無知な祖母がわざわざ招き寄せてくれた、ぼくの深い傷。無知こそ憎むべき悪徳だ。無辜の子供に悪の烙印を施し、美しい樂園から追放してくれる。この世界以外のところへ、一刻も早く行きたい。恥辱と屈辱にまみれた過去のからの逃亡が始まった。

外灯に照らし出された駐車場の夜景は、時間が止まっているように、ゆつたりと静かで、美しかった。運よくバスのドアが開いているときには、こっそりと中に入ってくつろぐ。自分だけの貸し切りバスになる。夢の暮らしの予行演習だった。

冬は寒かったが、外灯に浮かび上がった雪が、風に舞うのが綺麗だった。いつまで見ても、飽きることがなかった。寒いはずなのに、気持ちが暖かくなった。藎ヒヨドリにくるまったまま、茫然とした恍惚感の裡に時が経つのを忘れた。

同級生の誰もが読む漫画本がほしかったが、買えるはずもなく、いつも駅の売店で立読みをした。その日は何回目かの家出をしようと汽車を待っていた。日常が辛くて嫌になると家を出たくなる。時間つぶしに、いつものように漫画本を立ち読みしていた。汽車が到着したので、あわてて漫画本を手にしたまま、汽車に飛び乗ってしまった。本を元の場所に戻さねばならなかったのに。どうしてよいかわからなくなり、頭の中が混乱してしまった。呆然と汽車に揺られていくしかなかった。結局その日も連れ戻されたのだが、漫画本を持ったままだったので、家出だけでなく、今度は万引きの嫌疑まで一緒にいてくる羽目に陥った。

近所に住む祖母が、家出や盗みを繰り返すぼくを心配し、矯正を凶ろうとして警察に頼みこみ、留置所に放り込んだ。

小学四年生になったとき、兄たちに新聞配達をするように命令され、当然のこととして受け入れた。兄たちが皆そうしていたからだ。だが新聞販売店の店主は、ぼくが駅の売店から漫画本を盗んだことを言いたて、採用を断っていた。兄たちが頭を下げて頼み込んだ結果、しぶしぶ採用された次第だった。もちろん執拗に盗みはいかんと、店主から説教された挙句のことだった。盗んではいけないのに。

早朝、兄たちに叩き起こされ、半ば目をつむりながら、とぼとぼと配達店に向かう日々が始まった。真夏でも早朝は涼しい。肌寒いくらいだ。すがすがしい空気を吸い込み、まぶしい朝の光を浴びながら、けっこう健康的な日々だった。

配達先がなかなか覚えられなかった。配達途中で投函し忘れたことを思いだし、あわてて取って返すことが頻繁にあった。配達を忘れた家庭から苦情を言われ、店主や先輩に連れられて何度謝罪に向かったことか。庭先に投げ入れられた新聞を犬が食い破り、またある時は、濡れた庭に投入し、その家の主人にひどく叱られた。あるいは放し飼いの犬に追われ、車道に逃げ出し、危うく自動車に轢かれそうになったことも、たびたびだ。また激しい吹雪の日は、抱えた新聞の重みもあり、前になかなか進めなかった。吹雪に背を向け、身体を吹雪に預けて後ろ向きに歩いても、風圧が強くて身体は倒れない。精一杯後ろ向きに歩こうとするが、

なかなか進まない。時間の経過のわりには、配達にはかどらなかつた。気持ちが焦り、余計に体力を消耗して苦しく、疲れ切ったことを覚えている。

配達先の拡張営業の時は、先輩がぼくを連れて各戸訪問をする。

「こんな小さな子供を連れて、営業しています。お願いですから、なにとぞ新聞をとってください」

「同情をひいて拡張するの？ 仕方ないわね」

そういつて新規に配達を承諾してくれる若い奥さんもあつた。

「五十円上げるから引き取って」

と断られることもあつた。そんな時はその金を遠慮なく先輩は受け取っていた。

そんな日々が続くと、さすがに睡眠不足のせいで、元々意欲のなかつた学校の授業は、ほとんど上の空で聞き流すようになった。新聞配達をしていると、担任の先生が内容の知れない紙切れを持って来て、署名させた。数日経つと、教科書や体育館シューズがぼくのものになつた。給食代も不要になつた。ただ、学用品までは支給されなかつた。ぼくが新聞配達をしているのを知つて、学校側が配慮した結果だつた。同級生たちはそんなぼくを、ただ飯ぐらいとかわらかい、馬鹿にした。ぼくの頭陀袋のような、代々引き継

がれた母の手作りのズボンも、揶揄的になつた。当時テレビ映画の「ローハイド」が流行しており、その登場人物が身に着けているものと似ていたからだ。このズボンを作つてくれた母や、それをはいていた兄たちも、ぼくと一緒に馬鹿にされているようで、情けなくて悔し涙が出た。でも仕返ししようとは思わなかつた。そうしたくても、気弱のためにできなかつただけのことだ。鬱憤がたまつていつた。

新聞少年には映画の無料パス券が配布される。なものにも代え難い唯一の楽しみで、希望への切符だつた。子供をひとりで映画に行かせるのはよくないと、ピーティーエーから学校へ苦情があつたようだが、映画館はたまたま家の前にあつたため、館内に入るのを直接見とがめられることは、滅多になかつた。たつぷりと非現実の世界に浸りきつた。現実との接点を失うほどのめりこみ、ある種の現実喪失ともいへべき陶酔感を味わつていた。夢は膨らんだ。いつかは映画の中の世界へ行く。こんな町を捨てる。ぼくの将来の夢だ。特に外国映画はよかつた。暖かく青い海、まぶしく輝く紺碧の空、溢れるほどの光、見知らぬ町並み、言葉の通じない人々。そこは楽園だ。必ず行つてみせる。

でも一抹の不安があつた。日常生活で嬉しいことや幸福感を味わうと、いつもぼくは死にたくなる。悲しい時や苦

しい時に死にたいと願うより、歓喜や幸福の絶頂には、必ずこのまま死んでしまいたいと思う。楽園についたとたん

まさか本当に死ぬのではないだろうか。せつかくたどり着いた楽園なのに。

新聞拡張手当がもらえれば、映画館で二十円の烏賊の姿焼きが買えた。醤油で味付けされ、甘くて香ばしく、たまらなくうまかつた。それを味わいながら美しい映像を見る。ぼくにだつて、確かに幸福な時間があつた。暗い館内での、たつたひとりの密やかな陶酔の時、ぼくだけの世界。

配達料は当然のごとく家庭に入れられた。たまに十円貰えたときは、昼食としてコッペパンを一個買う。なにも買えない時は、校庭の中庭の水道水を飲む。休み時間は教室の窓から、独りでぼんやりともの思いに耽りながら外を見る。それに一番気に入つていたのは、鉄筋コンクリート校舎の屋上から、遠くの町を眺めることだつた。屋上への扉はいつも開いていて、ひとりでいても叱られなかつた。危険なため、実際には禁止されているが、単に見つからなかつただけかもしれない。その高い場所から自分たちの町はもちろん、はるか遠くまで眺めることができた。あの通りの向こう、あの煙突の向こう、遠くのあの大きな木の葉叢、歩いたことのない遠い町を異国になぞらえて、時のたつのを忘れた。いつかは手持ちの金すべてを握りしめ、駅の切

符販売所で、大きな態度で言つてやる。

「手持ちのカネはこれだけだ。行けるところまで、どこでもいいから、切符をくれ」

いつかは現実になるのを夢見ながら、時が過ぎていつた。

小学生の高学年、この頃、長く不在だつた長女が、ぼくたちと再び同居をはじめていた。長女はぼくの勉強をよくみてくれた。今まで理解できなかった宿題も、解けるようになった。行きづらく休みがちだつた学校も、気分よく通えた。宿題ができるようになり、同級生に対しても自信が持てるようになったからだ。

しばらくすると、近所に住む若い男が、わが家に足しげくたずねて来るようになった。ぼくたちにも優しい態度で接していた。時たま、普段は食べられないもの珍しい板チョコを持ってくることもあつた。でも長女が目当てなのは誰にでも知れた。

学校から帰つたある日、玄関口の土間でひとり平穏な虚脱感に浸っていると、奥の部屋で生き物が蠢く気配に気が付いた。押し殺したようなうめき声が聞こえ、生臭い匂いが漂ってきた。ぼくは足音と息を忍ばせ、おそるおそる、襖の隙間から部屋を覗いた。

あの男が長女に覆いかぶさり、二人はつながっていた。

男が長女を貫いているのか、長女が男を貫いているのか、見分けがつかなかった。男は荒い息を吐き、激しく身体を動かしていた。長女は眼を宙に漂わせて、涎を垂らしてうめき声を漏らしていた。貪りあうような音、獣が放つ匂いが部屋中に充満していた。黒い剛毛におおわれた男の肉と豊かで、白く柔らかな長女の肉が、互いに貪り食らいながら混ざり合おうとしていた。瞬間、ぼくは気づかれた。男が怒鳴った。

「どこかに行っている」

ぼくの胸は激しく鼓動を打っていた。訳のわからないことが起こっている。気づかれないように息を殺し、土間で死んだように身をひそめ続けた。

その時、三男が返ってきた。青白い顔でしゃがみこんでいるぼくを怪訝そうに見た利那、長女のいる部屋の気配に気づいた。三男はそとと部屋に入った。しばらくすると、怒号とどたばたと暴れる音とともに、近所の男が転がるように部屋から出てきた。毛深い尻を丸出しにして、ズボンを上げながら、戸外へ飛び出すように逃げた。三男は男の背中に向かって大声で叫んだ。

「二度と来るな」

長女と男がしていたことの意味が、よくわからなかった。しばらくの間、あれは何だと悩んだ。後日、それだとは理解できたが、以後、そのことに嫌悪を抱くようになった。

これも東京へ行ってから影響がでた。

長女は妊娠していたが、しばらく後に墮胎した。それ以来長女は、以前のように虚ろな目で空を見るようになり、時たま、不気味な薄ら笑いを漏らした。以前と同じ症状だった。

長女の、死んだ赤ん坊を入れた段ボール箱を、ぼくが抱きかかえて墓地へ運んだ。家族のだけれど嫌がること、それがぼくの役割だった。あれの光景と死んだ赤ん坊が、いつも連なつて目に浮かんた。それ以来、長女を見ると反吐が出そうな、嫌な思いを抱くようになった。長女は汚く、感じ悪い。海辺の長女が腐ってしまった気がして、ぼくは混乱した。長女と一緒に、海辺の暖かい想い出を突き詰めていくと、最後には痴呆のような涎顔と、墮胎した赤ん坊の姿が想いだされ、気分が悪くなる。ぼくを癒す光景が、おぞましい光景に変貌した。

人並みに容貌や身なりが気になりだす年齢、中学生になった。次男も三男も家を出ていた。服装は兄たちのお下がり、汚い身なりは変わることがなかった。顔つきも、今にも泣き出しそうな、悲しげな表情が身についた。町中の誰もが皆、小さなころからの顔見知りなので、ぼくをはじめとして、家庭の恥すべてが知れ渡っていた。どこにいて

も、誰もが皆、後ろ指をさして、嘲りの言葉を囁いているように思えた。周囲の者たちの、突き刺すような、あの目や素振りが嫌だ。身が竦んだ。ぼくの全身、心の内は、見透かされている。裸にされ、多くの視線に曝され、揶揄や侮蔑の視線に貫かれている。学校に行くのが嫌でたまらなかつた。誰にも見られず、独り家にいるのが心地よかつた。布団にくるまって、闇の中で音のない世界にいると、安心できた。

ある日、学校の廊下で隣のクラスの女子とすれ違つた。透き通るように色の白い娘だつた。ぼくは好意を抱いていた。彼女は自分の教室から図画工作室へ行く途中だつた。ぼくとすれ違つた利那、彼女は筆箱を落とした。鉛筆や消しゴム、定規などが飛び散つた。彼女のあわてる様子に、ぼくは落ちた消しゴムを拾って手渡した。彼女は礼を言つて、ぼくに背を向け、歩き去つた。初めて彼女と接触し、上気した気分になった。一瞬の後、ぼくは彼女を振り返つた。図画工作室の前に置かれたゴミ箱に、彼女が消しゴムを棄てるのが見えた。その後すばやく、彼女は汚いものを振り落とすかのように、両手から塵を払う仕事をして、教室に消えた。ぼくが触れたものを、彼女は捨てた。ぼくを不潔な生き物と思つているのだ。小学生の頃から、誰もが皆、そう思つていた。いまだにそうだ。血の気が引くような虚

脱感が襲つた。この世から消えてしまいたい。教室に帰る気も失せ、鞆もそのままにして、学校から逃げるように外へ飛び出した。他者の視線から身を隠し、自らの存在を消すように逃げた。情けなさが胸の奥底から湧き出した。家族の誰とも、近所の誰とも、会いたくなかつた。家に地域に居たくなかつた。町で生きることの嫌悪と苦痛を振り払うため、家出を繰り返した。

「学校にも行かなくて、オヤジとそっくりだ。血統だ。早くどこかへ行つてしまえ」

母は毎日のように言つた。

中学一年の十二月、父が死んだ。電車の中での行き倒れポケットには、十円玉がひとつだけ残つていた。たつた十円の所持金しかなく、惨めに死んだ憐れな父。そう思うと息苦しくなり、呼吸ができない恐怖に襲われた。

母が遺骨を引取りに行つた。

「あの博打うちが死んだ。赤飯炊くか」

母は確かにそう言つた。

母は本当に父を憎んでいたのか、それとも悪態は、悲しみを押さえつけるための強がりなのか。問えなかつた。網走に置き去りにされたことも、やはり聞けなかつた。母の本当の気持ちを知らぬのが怖かつた。葬式の翌日、次男は言つた。

「俺と三女は泣いた。おふくろは涙一つ流さなかった」
 少なくとも父は、ぼくに危害は加えなかった。嫌な思いはさせなかった。最後に会ったときの、寂しそうな父の後姿が思い出された。父を追って、一緒に暮らす、密やかな夢は消えた。唯一のぼくの希望だった、新しい家族の形は崩壊した。近所では、父が刑務所で死んだとうわさが広がっていた。そんなふうに言われる父が可哀想で、憐れで悔しくて、世間が憎かった。

ミカン箱で作られた父の仏壇。その奥で見つけた、父の検死写真。放浪の果て、電車の通路で寝込み、血の混ざった涎を垂れ流したまま、野垂れ死にした父の、惨めで無残なあの死に顔。父の死は、人の生涯というものを、否応なく見せつけた。血統を受け継いだぼくは、その死に顔に、自分の未来を見た。その惨めな死に顔がぼくになり、父に戻り、ぼくになった。いつの日か、流離いの果てに、死んでいくのだ。生まれてこなければよかった。生きることが嫌になった。生涯で初めて死のうと思ひ、衝動的に首をつろうとしたが、果たせなかった。死ねばすべてが終わる。この胸の裡の苦しさをなくすのは、死しかない。

父の後始末がすべて済んだとき、東京で就職し、再度帰省していた次男が、唐突に言った。

あるのだろうか。ぼくにはわからない。絶対に許せない。その頃は、駅の助役と恋愛関係にあった。二人でいる姿を、町の人たちが何度も目撃している。町中の噂になり、同級生たちがぼくをからかった。

「色狂い婆の息子」

地獄はいつも世間からやってくる。他者とは悪だ。奴らの視線と言葉がぼくを金縛りにして、痛めつける。わが家は悪徳と汚辱、貧困と悲惨の巣窟なのだ。

夫に見捨てられていた母は、今になって思えば、やっと真の未亡人になった。障碍から自由になったのだ。周囲の男たちにとっても、都合のいい女になった。

はじめに、妻子持ちの駅の助役と関係ができた。家に来た助役は、乗ってきた自転車ごと、母と二人で部屋に身を隠した。ぼくは百円玉を握らされ、いつも外へ放り出された。ふたりは何をしていたのか、もちろん理解できる年齢にはなっていた。

そのうち、関係は破綻した。助役は他の未亡人に乗り移った。その未亡人の息子はぼくを兄弟と呼んだ。そんな言われ方は嫌だった。不愉快だし、恥辱に胸が引裂かれそうだ。ついに母は、その未亡人と大立ち回りをやらかし、町中の話題になった。ぼくは町に居たたまれなくなった。

次の相手は、母よりずいぶん若い男だった。家に帰ると

「お前、網走のこと、覚えているか。言いたいことはないのか」

「うん？ 何も」

ぼくは一瞬ためらったが、そう返答した。でも本当は覚えていた。断片的で、脈絡がないまま。

「そうか」

次男はそのまま黙った。何やら怪訝な表情を残して。いったい、なぜ今頃そんなことを訊くのだろう。真意はわからないが、家族の中で、ぼくの思いを知ろうとしたのは、次男がはじめてだった。気にかけてもらったことが嬉しかった。

十四歳になったぼくは、もはや学校に行かなくなっていた。それどころか、生きる意欲がなかった。ぼくはよく、夢想した。こめかみにピストルを突き付けて、力いっぱい引き金を弾く。爆裂して、勢いよく吹き飛ばすぼくの頭蓋骨と脳漿。鮮血が雲散霧消して、あたり一面に飛び散る様はなんと痛快なのだろう。すべてが終わるのだ。ぼくは飛び散る。ぼくの血は、まるで復讐するかのような勢いで、世間への当てつけとして、激しく世界に飛び散る。死は、頭蓋骨の爆裂と、すべてからの解放だ。

子供を何人も生んだ女が、少女のように恋愛することが

いつも男といちゃついていていた。見るのは嫌だった。しばらくすると、母はその男と数人で、北海道へ行ってしまった。ぼくは捨てられたと思った。実際の理由はよくわからない。助役を忘れるため、あるいは踊りを習うのにテープレコーダーが必要なので、その費用稼ぎだったのかもしれない。要するに金を稼ぎに林檎の袋掛けに出かけていたのだ。母は苦しくなると、いつも家族を捨てた。誰かが子供たちの面倒を見てくれるだろう。そんな程度の軽い気持ちの行動だった。あるいは何となく、漠然と大丈夫だろうという無責任さだった。食うものだけは買い置かれていたが、母が帰ったとき、洗濯されていないぼくの衣服は真っ黒だった。真夏だったから、まだ生き延びることができた。真冬の時期なら、とうに死んでいただろう。それから二人ほど、同じように男たちの出入りが続いた。

母は女であるより、やはり母であってほしい。母が女なのだと、子供は理解できない。男のために子を捨てるなど、思いも及ばない悪徳だ。悪魔から生じるような、どこから見ても、いかにも悪というような悪など、真の恐ろしさに乏しい。いかにも善良な人間から生じる、凡庸で、浅薄な罪の意識もない、想像力の欠如した悪ほど害を及ぼすものはない。

ぼくは姪に暴力を振るっていた。でも母には一度も手を

あげることにはなかった。しかも、怒れず、甘えることもできなかつた。母はいつも誰かれなく、ぼくのことを周囲に言っていた。

「あいつはなにも言わないの。いつもなにも。わが子ながら、なにを考えているのか、わからないの」

ぼくは自己主張がうまくできなかった。様々な想いで胸は満杯だったが、言葉で表現できなかった。怒りの勢いを借りてしか、意見が言えなかつた。何事につけ、耐え、克服することができなかった。いつも現実から逃げた。できることといえば、せいぜい、当てつけ行動だけだった。母の貯金通帳から勝手に金を引き出し、その困り顔を見ては溜飲を下げた。この当てつけの行動は後日までの困った習性となり、ますます自分を追い詰める結果になった。

中学三年の一学期、普通の生徒なら受験準備に忙しくなるころだ。でも、やはり学校には行きたくなかつた。この地域にいたくなかつた。欠席が続いた。学校の担任が家庭訪問に来る。特別ぼくを心配したからではない。単に順番なのだ。教師に課せられた義務に過ぎない。個人の生活に深入りしたくない先生たちだった。

担任はぼくを問い詰めた。なぜ学校に来ないかと。鋭くぼくを見据えた。

「行きたくないから行かないのだ」

さえ暖かい。トンネルを抜け、南へ南へと進む。海辺、風木々の緑、まばゆい光がぼくを包んでいた。

気が付けば、自転車で山形へ、そこから東京行きの汽車に揺られていた。でも金がなく、東京行きの切符は買えなかつた。仕方なく福島で下車するしかなかった。なんて馬鹿正直なのだろう。無意識のうちに社会の掟に従うなんて無賃乗車でよかつたのに。

ホームでぼんやり時を過ごすしかなかった。そして毎度のごとくになる。二人の鉄道公安員がぼくを捕捉した。捕捉者はいつも二人だった。また母がぼくを引き取りに来た。何度繰り返された挫折の儀式だろう。いつもこうだ。

季節の変わり目はよいことがない。秋のすがすがしさは心落ち着くどころか、なぜかざわついて、胸騒ぎがする。もうすぐ網走に冬が来る。

母は脳卒中を再発させ、町の病院に入院した。家計を支える母が倒れば、何がどうなるのか、世間的な心配事には思いもつかなかつた。ただ、飯も食わさない母親はくたばればよかつた。食わせられないなら、なぜ産んだ。自らの呪われた出生を想った。長女の墮胎した赤ん坊を想った。ぼくは愚弄の種として生まれた。

ぼくの暴力に、残された妹と姪は入院している母の許へ逃げた。ぼくは一人残された。何度も捨てられたが、独り

ぼくは睨み返した。刹那、担任はぼくの顔を二度三度激しく殴った。痛みと悔しさに胸が張り裂けそうだった。殴り返したかつた、と他人は思うものだろうか。ぼくはいつも弱気で臆病だった。恐ろしさが先に立った。今でも本質は変わらない。しかも母が担任と一緒にあって、ぼくを激しく非難した。母がぼくをかばったことはない。理屈など、どうでもよいではないか。ただ、母に優しくかばわれ、慰めてほしかった。いつも、どうしてなのだろう。ぼくは覚悟した。家を出る。

翌日、いつものように朝遅くまで寝ていた。誰もが出かけたのを確認し、みずばらしい服装を整え、家を出た。南へ行こう。もう北に未練はなかつた。町はずれで、放置された自転車を見つけた。鍵は壊れていた。ぼくはそれに乗った。そして漕いだ。ペダルを力一杯踏み込んだ。何度も繰り返す。スピードは上がり、風が心地よい。坊主頭の頭皮を、頬を撫でた。思わず苦笑するほどのこそばゆさが、全身に広がった。このまま、ぼくは風に吹かれて、放浪の旅に出る。ここでなければどこでもいい。この世の外ならどこへだって。ぼくは解放され、有頂天だった。足の疲労はぼくの自由の報酬だ。肉体の疲労なら大歓迎だ。見知らぬ世界へと近づいていく。

町を抜け、国道を走る。車がぼくを追い越す。排気ガス

きりになったのは初めてだった。網走でもなかつたことだ。いつも兄たちがいた。一人で越す冬に不安が募った。その時の食物の記憶は、干からびた大根、麦飯に醬油だけだ。

ぼくしかいない家には、近所の外れ者たちが出入りし始めた。呼び寄せたわけではない。仲間の誰もが居場所を探していた。集団で万引きをやり、かっぱらいをする。知らない間に、わが家は盗人の巢窟で、盗品の保管場所になっていた。網走時代は、かっぱらい品を抱えた兄の後を、必死で追いかけて、逃げた。今はそれを抱え、逃走する役割が回ってきた。

ぼくは足が速かつた。強制的に加入させられた陸上部の活動。駅伝に優勝したこともあった。その時だけは、ぼくは周囲から承認され、普通の人になれた。でも実際は、こんなことにはしか使えなかつた。窃盗の逃走役としての承認仲間が、世間が認めたのだ。ぼくは居場所を確保した。悪童たちだったが、初めての仲間だった。排除されるよりはましだ。

食事は当然なかつたが、隣近所から漬物が届けられた。また仲間の一人が焼肉屋の息子で、頻繁に牛モツを差入れてくれた。彼のおかげで生延びることができた。断じて親や兄弟のおかげではなかつた。

その頃は誰もが就職に向けて、衣類や必要なものを揃え

ていたが、ぼくには何もなかった。普段からどうしようか悩んでいた。就職のため、せめて春にはワイシャツがほしいかった。

ある日、かつばらいの店を物色していると、偶然母と妹に出くわした。母と妹は笑っていた。母は言った。

「元気にやっているか」

ぼくは無性に腹が立った。食物もなく、風呂にも入れないぼくの姿を見て、よくも笑えるものだと思った。自分のしたことがわからないのだ。ぼくの中で鬱憤がはじけた。

本来なら、仲間たちが店内を見回し、すきを狙って商品をつかっぱらい、全員がちり散りに逃走し、大事な品物はぼくが受け取って逃げる。ところが怒りのあまり、ぼくは母たちへの当てつけに、目の前で単独でワイシャツをかつばらって逃げた。背中で店主の怒鳴り声が聞こえた。走った。何度も繰り返された中で、最高の当てつけだった。

母と妹は聞いただろう、店主の怒鳴り声を。驚いただろう、ざま見ろ。あとで呼び出され、説教されるのだ。謝罪するのだ。愉快だった。

当然のことながら、ぼくたちは捕まった。窃盗品はすべて没収された。母は学校に呼びつけられ、厳しく叱責された。鬱憤が少しは晴れたが、その分悲しみがなおさら鬱積した。

被害者の方がむしろ、ぼくの苦しみを理解していた。集団就職を控え、未来ある少年ということで、学校や警察には穏便な措置を願って出してくれた。ぼくはまだ、完全には社会から見捨てられてはいなかった。でも、配慮できなかった。他人の思いやりに感謝することを。追いかける店主の怒声の恐ろしさが強い印象として残っただけだった。だが卒業だけは承認された。出席日数不足の認定卒業だった。義務教育とやらが終わったのだ。

やつと東京で就職が決まった。今までは、すべてが綱走と板柳だった。これからは東京が、不安と胸を焦がす未知の明るい世界になる。金の卵と呼ばれる集団就職の一員だ。ぼくは生まれ変わる。

母が言ったものだ。

「あいつが東京へ出て行ったら、赤飯炊いて喜ぶさ」

厄介者が離れる時は、いつも赤飯を炊いて喜ぶのだ。赤飯炊きたいのは、何もあんなだけではない。ぼくだって。

東京へ着ていくものがなかった。盗んだものはすべて返還したが、ワイシャツだけは決して返還しなかった。必死で隠しておいた。唯一胸を張れるぼくの物。これを身に着けて、東京へ出ていく。未知への希望と不安が錯綜していた。

見送りの駅では、様々な就職先へ向かう、大勢の者がい

た。誰もが家族と別れを惜しんでいた。でもぼくには、誰の見送りもなかった。東京までの旅費は、就職先が負担してくれた。ぼくのは、ワイシャツと千円札一枚、これがすべてだった。三男が送ってくれた三千円のうち、二千円は母がとった。残りの千円がぼくに渡された。大事な財産をなくさないように、そとで掌で何度も何度も触れてみた。帰る事のない青森を背に、不安でいっぱい東京。心細かった。

昭和四十年三月の終わり、上野駅に着いた。三男が、上野駅まで迎えに来ると手紙で言ってきたが、いくら待っても現れなかった。多くのビルや混雑する人ごみと車を眺めながら、あれがそうか、それともあれかと、三男の姿を探したが、その姿はついに見えなかった。肝心な時に来てくれない。しかたなく、心細い気持ちで、独りで初めての就職先へ向かうしかなかった。

渋谷の大手フルーツパーラーに就職し、他の集団就職の仲間と入寮した。新入社員は三、四十人いた。母がどこからか貰ってきた古いポストンバッグに、少しばかりの衣類と中学の教科書を入れて来た。教科書は捨てきれなかった。どうして教科書なのか。やはり他の同級生たちと同じように勉強して、高校へ行きたかった。勉強すれば違う自分になれると思った。異なる境遇で生きられると思った。でも

結局、何をやってもうまくいかなかった。この世では、すべては叶わぬ夢だ。所有物といえば、これしかない。これだけが唯一のぼくのもの。夢の残滓。だが何度読んでも、まったく理解できない。さっぱりわからない。無念だ。いや、教科書だけではない。母への当てつけにかつばらったワイシャツがある。これこそが、ほんとうにぼくの物。それを身に着け、独り世渡りをするしかない。そう思うことは、他人にとっては何ほどのこともないだろう。でも、気弱で臆病なぼくにとっては、特別な強い決意が必要だった。

入社の動機を聞かれれば、手で物を作るのが好きだからと答えた。まったくの嘘ではなかったが、実際には不器用で、物づくりなど上手にできなかった。ただ、何につけても、新品を与えられることがなかったので、いつも自分が納得するように、中古を修理して使用していた。教科書やノート、ぶかぶかのズボンや靴など、所詮子供のすることだけど、懸命に補修した。そんな時は確かに時間を忘れた。それなりの達成感もあった。もちろん、上出来と思えることはなかったが。

何が何でも、あの嫌な思い出しかない場所から脱出し、新しい生活を獲得しなければならなかった。佻しく、辛く、苦しい殺伐とした郷里での生活は、誰にも知られたくなかった。思い出したくなかった。不安を打ち消すためにも、

にぎやかな街で暮らしたかった。喧噪のなかで、いやなことすべて忘れてしまった。何もかも忘れるために、必死で働いた。

新入社員研修の最中、講師から「給料は誰からもらうか」という質問が出た。誰もが「社長から」と答えた。

「お客様から」

ぼくは答えた。褒められた。研修用テキストを必死に学習した成果だった。とにかく何としても、新しい所に馴染まなければ。

また、北海道生まれのおかげで方言が目立たず、地方訛りをからかわれることがなかった。これだけが唯一ぼくの幸運だった。ひどい訛りの他の仲間、物まね口真似と、からかいの的になっていた。人はなぜ、こんなにも他人を傷つけるのが好きなのだろう。そのたびにぼくの胸は疼いた。

ぼくは誰よりも早く髪を伸ばし、ネクタイをつけた。友達付き合いは悪く、無口だった。これは生来の気質であり、他人や世間を警戒しているためもあり、他人に圧倒されて精神的にも自分を確立できないということでもあった。いずれにせよ、引つ込み思案で協調性はなかった。社内旅行へもいかず、独りで過ごすのが安穩だった。当然変わり者

後日、沖仲仕をやっていた頃、商売女と接触する機会があったが、何もできなかった。どんなに綺麗な女でも、黒々と繁茂する陰毛と、あの性器を見るだけで、気持ちも身体も萎えた。女はぼくのことを勃起させようと、しつこくいじくりまわした。引つ張つて無理やりこすり付け、挿入しようとしたが事は果たせなかった。ゴムではないのだから、引つ張つても勃起しないよ。無理というものだ。当然射精などしなかった。あんなおぞましいものに触れたぼくのことを、暗がりの中、公衆トイレの水道で、必死に洗った。皮膚が擦り切れ、しばらく痛かった。女には生涯縁がないと思った。欲望に没入できなかった。目の前に女性器が開かれていても、ぼくは他のことを考えていた。どのような状況でも同じだった。現前のものに心が向かなかった。ぼくの心はいつも虚ろで、現実界とは別の異界にいた。

休日には、仲間たちは外出するか、寮内で騒いでいたが、その輪に入る気もしなかった。ただ一人での読書や、映画鑑賞が習慣になった。「チコと鮫」はぼくを夢心地にさせた。その他は戦争もの、脱走もの、命がけの波乱万丈に胸が躍った。「大脱走」が最高に好きだった。囚われの身から脱出するための工夫、細工、努力、あの緊迫感がたまらなく胸を躍らせた。それに、思い出すのもつらく息苦しいが、東京プリンスホテルで、はじめての殺人を犯した翌日、

とみられ、独りでいることがますます増えた。

でもどういふ訳か、女子店員には人気があった。女子店員の誰もがぼくに優しく話しかけ、近寄った。無口で気弱そうな印象がそうさせたのかもしれない。ぼくの方ではどう接してよいかわからず、積極的に近寄られれば、かえって冷たくあしらっていた。

いつも親しげに近寄る女子大生のアルバイトがいた。

「ねえ、今度お給料が入ったら、お食事しない？ そのあとホテルで休憩するのはどう？」

ぼくの耳元で甘くささやいた。生暖かい吐息がこそばゆい。不快だった。

彼女の言っていることが、言葉としては理解できたが、そんなとき、実際にどうするのか、まったくわからなかった。不安と混乱の拳句、逃げてしまう。

「お力ネあげるから、一人で行けば」

ぼくは不愛想に断ってしまった。

「失礼ね！」

彼女は怖い目でぼくをにらんだ。それ以来、彼女がぼくに口をきくことはなかった。

女に誘われても、二人きりになれば、何をすればよいのか、想い浮かばない。もちろん話す内容など何も無い。そんな状態でホテルなどに入っても、ただ手をこまねいているだけで、何も進展しないだろう。

逃走先の京都で映画を見た。フェリー二の「道」、あの無辜の女が可哀想で、憐れで、涙した。滑稽で厚顔な同一化と非難されるだろうが、ぼくもあのように寂しく死んで行くのだと思つた。またぼくは被圧迫者であり、被害者の意識しかもたなかった。それ以降、映画を見る気持ちを喪失した。それが生涯最後に見た映画となった。ぼくを支えていた仮象の世界が消え去った。独りでいるのが怖くなった。以降は、ただ逃亡するための日々となった。

フルーツパーラー男子寮のクラブ活動では、陸上部に所属して頑張つた。神宮外苑でランニングの課題をこなした。まるで学生が学業の合間にする息抜きや、一仕事終えて気分転換と明日の鋭気を養うサラリーマン同様、ぼくは誇らしげに走つた。

それなりに落ち着いた生活を送っていた。余裕ができるのと、生まれて初めてパーカーの万年筆を買つた。三省堂のクラウン英和辞書も買つた。手に取つて眺めているだけで幸福だった。本というのは本当に美しい。印刷の匂いも好きだ。たばこも吸つた。ポールモーテル。ジッポのオイルライターも。ファッションはもちろんアイビー・ルック。大学生は、ぼくの手の届かない憧れだった。どこでもよかつた。学生証がほしくなつた。拾つたものに自分の写真を貼つた。偽の学生証をつくつた。発覚が不安ではあつた

が、学生証を見せ、不要なものを質入れした。店主は学生が小遣い欲しさに質物を持ってきたと思ってくれた。誰に、どんなところで見せても、ぼくは大学生として通用した。生活に余裕のない、地方出身の大学生に変身できた。虚飾の自分に有頂天になった。

東京という新天地に、少しは慣れた真夏の夜だった。仕事を終え、寮の部屋で独りぼんやりと体を横たえていた。じっとしていても汗が全身から滲み出した。不愉快で苛立つ気持ちが充満していた。開け放した窓辺に据えられた、扇風機の風は気だるいが、心落ち着かないぼくを、少しだけ慰めてくれた。まだ日中の熱気が残り、むせ返る暑さが渋谷の街全体を覆っていた。

何やら先ほどから近辺が騒々しい。ぼくは外へ出た。大勢の人ごみに交じって、騒動の中心へと流されていった。銃砲店でライフルの乱射事件が発生していた。犯人は若い男で、人質を取っていた。防弾チョッキを着用した警官が、まさかの数千人と、ヘリコプター数機、パトカー数百台、数千人の野次馬が入り乱れ、喧騒と怒号が地鳴りのように響いていた。激しい銃撃音が続いた。まるで映画を見るような、それでいて、やはり実際に目の前で、何人もの警官や野次馬が血を流していた。撃て、もつと撃て、警官も野次馬も、そしてぼくをも撃て。頭を打ち抜かれ、一瞬

にぼくは死ぬ。血まみれで華々しく、血しぶきを吹き出しながらの死。ぼくは陶醉し、妄想した。命の破裂、突然の破滅的な死を。

この騒乱の犯人に、ぼくは同化した。野次馬の一人であり、犯人だった。周囲の警官や野次馬が仮想の敵だ。険しい表情で、警官隊と脳天気で善良な市民の野次馬を見据えた。撃つ、すべてを殺戮する。ぼくは決断した。皆殺しだ。そして最後にぼくは、銃弾で蜂の巣のように穴だらけにされ、粉砕されて絶命する。

事件が終結し、寮に帰っても興奮は治まらなかった。ぼくはその様子を同僚たちに昂揚して語った。しかも、おそらくは興奮して、少し楽しみに、あるいは酔うように。同僚たちは、ぼくを奇異のまなざしで見つめた。どんな顔をしていたのだろう。あの行為、あの犯行は同僚たちにとって、永遠に自分の身にはかかわりのない他人事なのだ。まさしく善良な市民たちには、生涯自分とは関係のない映画の世界、他人だけがする犯罪行為、他人だけが被害者、画面の中の仮象の凶行なのだ。ぼくはなぜか、いたく落胆した。せつかく慣れてきた東京にも、仲間たちにも、通じ合うものがないように思えた。ぼくとは違うのだ。違和感と孤立感に今更ながら呆然とした。

嬉しいことがあった。真面目で熱心に仕事をしたおかげ

で、新店舗の担当者に抜擢されたのだ。店はぼくを評価してくれた。これで本当に新しい自分に生まれ変わる。網走や板柳、あの家族から、あの地域から、過去から脱出できる。

そんな矢先、突然上司に言われた。板柳での衣料品窃盗のことを。衝撃だった。胸の奥から足元まで急激に血の気がひいた。もうだめだ、すべてが終わった。頭を殴られて気絶する感覚が襲い、気持ちが落ち込んだ。ぼくは生まれ変わりがなかった。なのに、過去はどこまでも追いかけてくる。ぼくが新しくなることを認めようとはしない。過去がぼくの今も、未来も支配する。

ぼくは世間を知らなすぎた。勤務先の人事担当者は、毎年若い金の卵を獲得するために全国を廻っていた。当然ぼくの卒業校へも出向いていた。就職した者たちの近況報告と、来期の新卒者獲得を願いに訪問していた。過去との完全な断絶は期待できようがなかった。過去は現在と未来に、密接に繋がってぼくを支配していた。

「みんなよく頑張ってくれています。特にNの評価は高く、新店舗の担当者に抜擢するつもりです」

「え！ あいつがですか。人は変わるものですね。家出と窃盗常習者がね」

学校関係者は、ぼくの良い変わりようを褒めるために言ったものか、単純な無思慮でつい喋ってしまったのか、真

意はわからない。いずれにせよ、知られたくない過去が、現在に持ち込まれた。教師とは、生徒の未熟で出来ない過去を携えて、現在と未来を規定しようとする、時間の媒介者なのだ。

上司や同僚たちは徹底してぼくを分析し始めた。家出や窃盗を非難し、からかいや物笑い、軽蔑の種にした。解剖されて好奇的になつている蛙と同じだった。ぼくは悔しさと情けなさが入り混じった惑乱を味わった。そんな時、どうしてよいかわからない。どんなふうに対応し、克服するのか。

あの熱狂の夏が過ぎ、肌寒い季節になったころ、ぼくは仕事への意欲をなくしていた。家出や窃盗の過去が知られ、居辛くなっただけではない。自分の気性もある。仕事を覚えるまでは懸命に頑張るが、不自由なく、日常的な仕事をこなせるようになると、どういうわけかやる気が失せた。新しい生活が色あせて映った。慣れないことに精を出し、無理をしていた結果だろう。寮の清掃をはじめとする、店の取決めごとを手抜きするようになった。

こんなぼくでも、気分が浮ついて上機嫌な時がたまにはあり、悪ふざけをすることもあった。そんなときに限って、失敗をやらかすものだ。ある日、ふざけて箒ほうきを振り回し、廊下の電燈を割ってしまった。一般には、謝罪し、破片を

片付け、場合によっては弁償し、以後このような事のないように反省し、行動する。それでおしまいになる。でもぼくはそれができない。なぜかつまらない些細な失敗でも、重大な取り返しをつかない、大それたことをしてかした気持ちになり、大きな罪責感に押しつぶされ、身が縮み、謝罪もおぼつかなくなる。反動として、周囲の者の叱責はより大きなものとなる。以後、可愛がつてくれた部長にも叱責されるようになり、仕事の失敗も続いた。あれやこれやの失態、侮蔑に対する情けなき、腹立ちの錯綜する感情のまま、とうとう限界が来た。激情に駆られた。逃げるしかない。おまけに知られたくない過去が、あからさまになっている。首になるに違いない。ぼくをなかなか雇おうとしない。首になるに違いない。ぼくをなかなか雇おうとしない。首になるに違いない。ぼくをなかなか雇おうとしない。

言葉のやりとりがうまくできなくて、他人と上手に交流できなかった。自分の気持ちをもうまく伝えられず、他人の気持ちも理解できなかった。社会の仕組みも知らなかった。給料も貰わず、失業保険の手続きも知らず、健康保険証も放置したまま会社を辞めた。九月の終わりだった。

東京へ出て以来、頼りにしていた三男の住む荻窪へ向かった。場所がよく分からない。無賃乗車をしながら、なんとかたどり着いた。

三男は何しに来たとばかり、わずか二、三百円を握らせ、

し測ることもできなかった。とにかく、誰かれなく、叱られることだけはもう嫌だった。おとなしくしていれば、一応は安穏な日が送れる。フルーツパーラーを辞め、一月が過ぎた十月の終わりだった。

長男は宇都宮の自動車整備工場に、ぼくを見習いとして送り出した。更生への道を歩ませるべく、奔走したのだ。「あいつは馬鹿で、頭が少し弱いのです。ろくに学校へも行ってはいけません」

昔のことを言われるのは嫌だった。学校の成績が悪く、周囲から馬鹿にされたのを思い出すのは、辛かった。馬鹿と言われるたびに、長女の姿が思い浮かんだ。ぼくも頭がおかしいのだと思った。身内がそう言うのだから、間違いないのだろう。

そのせいか、指示される仕事は単純作業ばかりで、やる気が起こらなかつた。フルーツパーラーでは一応接客もしていたのに。仕事は楽しくなかつた。

休憩のときなど、皆が楽しげな笑顔で会話をしているも、自分はその中に入れなかつた。いつも通り、人の輪に入れない。家出や窃盗のこと、更に密航のこと、すべてを知られ、語られる言葉はぼくへの非難や中傷のように思えた。同僚の視線は、ぼくを軽蔑しているように思えた。

ぼくを追い返した。初めて東京に出て、心細かったときも出迎えに来てはくれなかつた。三男に見捨てられたら、もうどうしてよいか判断が付かなかつた。しかたなく簡易宿泊所や野宿でしのぐしかなかつた。

しばらくしたある日、古いボストンバッグ一つを手に、東横線で桜木町まで行った。横浜埠頭をさ迷い、潮風に吹かれて青い海と空を見た。心細さが胸の内に広がった。新聞配達をしていたとき、貰った切符で見た外国映画、眼前の海が繋がった。行きたい、明るく碧い海へ、そう思うと、ただもう、自然と身体が動いた。まるで船に吸い込まれるように。現実的な計画は何もなかつた。

潜んだ船は客船ではなかつた。意味は分からなかつたが、英語に違いなく、間違いなく外国船だった。とりあえずは身を隠す場所が必要だった。ロープや道具が置かれた、狭い物置に隠れた。ところが、寒さと酔いで、食べた物すべてを吐いた。朦朧としてるところを、あつけなく船員に見つかってしまった。何も考えずに乗り込んだのだから、簡単に見つかるのもまた当然のことだった。香港、大使館、貨物船、横浜港の手順で、海上保安部に逮捕され、書類送検となつた。

萎れきつたぼくを、栃木に住む長男が引き取った。迷惑をかけたとか、感謝の思いはなかつた。そんな言葉を持たなかつたのだ。自分が茫漠としていた。他人の気持ちを推

長男の家に居候していたので、給料の半分を長男に渡していた。でも長男は、ぼくの不安や仕事への不満を聞いてはくれなかつた。話し相手になつてもくれなかつた。職場でも、居候先でも一人ぼっちだった。幼いころからの、辛かつたことなどを聞いてほしかつた。話しかつた。子供を作つて放置したまま、家族に迷惑をかけ、家を出た自らの無責任さの詫びもなかつた。徐々に長男への不満がぐずぐず、増大していった。長男を困らせてやりたかつた。機会があれば。

鬱屈したいいらを紛らわすために、夜の町をあてもなくさま迷つた。小さな外灯に浮かぶ薄暗い家々、浮きあがる水溜り。猫がじゃれ合い、犬の遠吠えが聞こえる。そんな町の寝息がぼくを落ち着かせる。そしていつも、疲れ切つた身体を引きずつて、居候先へ帰ることになる。

翌日には、いつもの面白くない仕事が始まり、長男への不満と職場への鬱憤がたぎり始める。なにか意趣返しをしないと気持ち治まらない。

入社から二週間過ぎた頃の休日、手持ちの金もなく、居候先でじつとしていられるのも退屈で、昼間からふらりと町へ出た。東京にいたころは、何を見ても珍しいことばかりで、街に出ると時間を忘れたものだが、宇都宮には何も無い。育つた町とたいして変わらない。

町の商店街の外れで、小さな食肉店が目に入った。腹が空いていたせいか、食肉店の陳列ケースに目が行った。牛モツが目に入った。かっぱらい仲間からの差し入れを思い出した。店には誰もいないようだった。奥のレジがぼくの視線を釘付けにした。まるでレジがぼくを呼ぶように思えた。頭の中で、長男の忌々しい顔が浮かんだ。レジと長男の顔が交錯した。瞬間、引きずり込まれるように歩みよつた。わざと大きな音を立ててレジを揺すった。誰か、聞けこの音を。盗むのではない。盗んでなんかやるものか。繰り返すうちに後ろで大きな声があった。

「こら、何やってる！」

ぼくは逃げた。しばらく走ると、パトカーのサイレン音があった。後ろからどたばたと、人が追いかけてくる足音が増えてきた。さすがに疲れたところを、こんな時いつも現れる体躯の頑丈な男たち、警官二人に追い詰められ、逮捕された。再就職から半月過ぎていた。ざまみろ。ぼくのとて長男が慌て、困惑する姿が浮かぶ。少し溜飲が下がった。完全に怒りが消えたのではないが。

宇都宮少年鑑別所に収容され、鑑別審査に付された。毎度同じことの繰り返しだった。世間がいつもぼくを細かく観察し、分析し、判定を下す。まるでモルモットを解剖するように、ぼくを断罪する。世間はぼくの裁判官で、神様

でもなく放浪することになった。もう寒い所にはいたくなくかった。どこでもよいから、少しでも暖かい方へ。ぼくはヒッチハイクで大阪へ向かった。

年の暮れの、排気ガスの混じった風が冷たかった。道路脇に佇んで、走り抜けるトラックめがけて手を上げ続けた。数時間経過したところに、やっと一台のトラックが止まってくれた。いかにも荒くれふうの言葉遣いをする運転手だったが、親切にトラックターミナルに送ってくれた。彼らは次々と仲間の運転手に声をかけ、まるでリレー走のバトンタッチをするように、夜通し走り続けて、大阪まで引き連れてくれた。安堵の気持ちで全身を充たした。

今里のロータリーの片隅に降ろされた。夜が明け、朝日がまぶしかった。ゴミ箱を漁って、見つけたスポーツ新聞の求人欄で仕事を探した。守口市内の米屋を見つけた。公衆電話のボックスから電話をかけ、守口車庫前行のトローリバスで向かい、住込み店員として雇われた。

雇い主には気に入られたようだった。ご主人の奥さんは小太りで、明るく愛想がよかった。ぼくにも親切に接してくれた。月給は一万五千円で、そのうち五千円を母への仕送りにまわした。就職してしばらくした頃、身元確認の意味で戸籍謄本の提出を要求された。取り寄せは母に頼んだ。

しばらくして、母から届けられた戸籍謄本を見た。本籍

の如くの存在なのだ。世間？ 世間とは目の前の他人であり、彼らであり、彼女たちだ。弱気にせよ、世間に独り対峙できるほど、ぼくはまだ自分が確立されていなかった。どこへ行っても、ぼくは排除され、痛めつけられる。どこに原因があるのだろうか。考えるのも嫌だ。死んでしまえばどんなに楽なことだろう。

結局処分保留となり、復職した。半月後の十一月二十日を過ぎていた。その時、長男は雇い主の前で、散々ぼくを殴りつけた。殴りたいのはぼくの方だよ。高校の時に子供をぼくたちに押し付けて、家を出て、好き勝手にして、殴りたいのはぼくだ。あんななかに殴られる覚えはないよ。いつか見ておれと思った。結局窃盗でうつぶん晴らしは、何ら効果はなかった。

年末、同僚たちにはボーナスが支給されたが、自分にはなかった。

「自分だけもらえないのはおかしい」

不満を口にした。会社の仕組みや世の中のことを理解していないかった。

「もらえると思う方がどうかしている。辞めてしまえ」

いとも簡単に解雇になった。就職した年の終わり、昭和四十年十二月だった。

長男の家から放逐された。わずかな手持ち金だけで、当

地は「北海道網走市呼人番外地」と記載されていた。不吉な予感がした。流行の映画、「網走番外地」シリーズが脳裏に浮かんだ。父が刑務所で死んだと噂されたように、刑務所と出生が結び付けられるに違いない。世間の連中はでつちあげの筋書きをつくって、揶揄し、嘲笑し、ことあるたびに侮蔑の言葉を浴びせ、差別するに違いない。

だからこそ、番外地では困る。刑務所生まれと誤解され、いじめられる。ぼくは母を介し、番地をつけてくださいと、町役場に懇願した。でも、役場はまったく相手にしてくれなかった。そんな要望が聞き入れられるはずもなく、取り寄せた戸籍謄本は店に提出できなかった。取扱いの判断ができなかったのだ。しばらくの間、店から与えられた机の引出の中に隠しておいた。その間にも、奥さんから何度も催促があったが、ぼくは適当な嘘をつきながら、提出を先延ばしにした。隠された戸籍は、しばらくの間秘密の安穩な時間をもった。単なる一片の紙切れに過ぎないものが、何か特別に重大な意味を含んだものとして取り扱われた。

ある日、店の者全員で食卓を囲んでいた時、奥さんが穏やかな笑顔で言った。

「あなた、網走番外地で生まれたのね」

一瞬驚いたが、呆然としてうなずくしかなかった。誰かがぼくの机の引出の中を見たのだ。

全員がぼくを見た。好奇の眼だった。その時は、誰も何とも言わなかった。沈黙のひと時が過ぎた。それ以来やはり周囲の者たちの眼が変わった。

後日、先輩は覚えてで、下手なギターを弾きながら、映画「網走番外地」の主題歌を歌った。そして笑いながら言った。

「おまえ、網走番外地で生まれたのか。頬に傷までつけて、まさしく極道の血統に違いないね」

左頬のやけどの傷跡、これはいつまでも揶揄的になった。子供時代の悪ふざけから生じた、単なる不注意の傷跡なのに。暴力沙汰の結果だと言われるのはまだよい。危惧したとおりになった。ぼくは刑務所で生まれたと思われている。左頬の傷は罪人の子の表徴となった。善良で清く正しい庶民たち、そんな彼らになりたいして悪意なく、ぼくをひどく苦しめる。過去がぼくを意味づけ、束縛し、現在と未来の姿を決定する。ぼくは新しく生きられないのか。ここでもまた、居たたまねなくなった。米屋に？ あるいは世間に？ いつものように、ぼくは逃げた。

結局、東京へ戻ることになった。目立たず、世間の口の端に上らず、出生も育ちも知られず、人ごみにまみれて、金さえあればけっこう楽しい街、自分だけで生きていける街、この国では東京しかないと思った。

をうろついた。海の香りとほどよい潮風が心地よかった。

ある日、日焼けした屈強な三十代の男が声をかけてきた。「兄さん、沖仲仕やらんか」

「はあ」
これで沖仲仕になった。重い荷を担ぎ、運んだ。この頃が肉体的にもっとも壮健だった。ぼくの肉体は惚れ惚れするほど頑健で、生命力に溢れ、美しかった。

沖仲仕になって、二週間も過ぎた頃、なんとなく、米海軍横須賀基地周辺をふらつくようになった。どこを歩こうと、特に夜は魅力的だった。土の感触はもろろん、コンクリートやアスファルトの道でさえ、歩むごとにその息吹を伝えてくれるようだった。車道に佇めば、まぶしいヘッドライトや赤いテールランプが綺麗だった。そのうえ道路には、夏の名残の風が吹いている。光の動きや風の流れを味わいながら、不思議な安堵感に包まれる。バス停におかれたベンチに座って、煙草をふかしながら、いつまでも車道を眺めていると、時の過ぎるのを忘れた。都会の風と音と光がぼくを慰めてくれる。

そんな夜に、青白く浮かぶ米軍基地は美しかった。瞬間、高い塀に飛びついていた。塀の最高部に、かろうじて指先がかかった。足を必死に動かし、両腕に渾身の力を込めてよじ登った。そして塀の内側に飛び降りた。

ここで見つければ、ただでは済まない。アメリカ兵に銃

中学卒業後の翌年、昭和四十一年七月、池袋の大きな喫茶店に住込みで働いた。落ち着けるかなと思ったが、相も変わらず同僚とうまく付き合えなかった。同僚の言葉に反論もできず、揶揄に耐えられず、無視することもできなかった。結局、小さな揉め事の後、いつもと同じ、給料も貰わないで退社した。

直後、羽田空港内の「東京ターミナルホテル」にベルボーイとして採用されたが、長続きしなかった。他人のことがよく理解できなかった。当然サービスも行き届かなかった。勤まるはずがなかった。なんだか自分には向いていないと思った。姿を消すしかなかった。会社は無断で辞めた。昭和四十一年の八月、退屈のぎに浅草を歩いた。縁日が好きだった。子供の頃は何も買ってもらえなかったが、今なら自分で買える。トウモロコシが好物だった。必ず買った。がむしゃらに嘔り付く。食べ終わると、もう一本欲しくなるが、金もないので買うのを辞めておく。

そこで、トウモロコシ売りの、愛想のよい兄貴と話すことができた。忙しい間だけアルバイトをさせてもらうことになった。いつものことで、愛想のよい、陽気な売り子にはなれなかった。

夏祭りの季節も終わり、ぼくは横浜へ流れた。相変わらず海を見るのが好きだった。何することもなく、終日岸壁

撃され、脳みそを吹き飛ばされ、鮮血まみれの死体になる。何時の頃からだろう。脳みそごと吹き飛ばされることを夢見だしたのは。

いつも不思議な気がする。その直前まで、誰もがぼくに気が付かず、その行為が完了したとたん、必ず確保されることだ。まるで物自体がぼくを使喚し、その行為の実行を周囲に讒言するかのよう。

自動販売機を壊して金をとりだそうとしていた時、やつとアメリカ兵に捕まった。捕まったとき、安堵感がぼくを充たす。捕まる不安が消滅したからではない。ぼくが捕まれば、困る者がいる。それが愉快だからだ。

留置場内は、デモで逮捕された大学生であふれていた。アメリカ原子力潜水艦「スヌーク」寄港反対デモで逮捕された学生たちだった。

隣に座っていた長髪の人懐っこい大学生が、真顔でたずねた。

「何したの」

「窃盗未遂」

「何を」

「横須賀基地内に侵入して、自販機荒らし」

「へえ、大胆。度胸あるね。下手すれば撃ち殺されていたよ」

「うん、撃たれて死ねば、それでもよかった。大学生は、デモに自分をかけられるが、中卒の俺には何もかけるものがない。死んだ方がましなもの」

学生と話しながら、アメリカ兵に頭を撃たれ、粉々に砕けた脳みそが強風に吹き飛ばされ、海面を漂いながら徐々に海底に沈んでいく光景を、ぼくは心の裡で思い浮かべていた。どういう訳か、身の上話までしてしまった。ぼくに興味を持ってくれたのは、その大学生がはじめてだったからだ。何度も自殺未遂をしたことも話した。

「誰もが皆、いずれ死んで行くのに、なぜ死に急ぐ必要があるの？ 過去に囚われるのは、きみがほんとうの意味で、未来を生きようとしていないからだよ。過去と現在を糧として、自己を未来に投企すべきだよ。他人事のように流されて生きるのではなく、真摯に自己と向き合い、いかに生きるべきかを問う、本来的な生活をするべきだよ。きみのように内部指向的な人間には、学問が向いているよ。定時制高校へ行けばいいよ。日常のあらゆる苦しさは耐え、克服することだ。未来が必ず見出せるはずだよ。乱暴に言えば、過去を全否定し、未来に突出せよ、ということだ。死にたいなんて考えている暇はないさ。今を、未来を生きるのが精いっぱい」

「自分が過去を乗り越える心構えは、よくわかりました。でも、他人が現在のぼくを傷つけるために過去を持ち出し、昭和四十二年一月の末頃、牛乳販売店の求人広告を見て応募した。留置場の大学生の言葉を胸に、三男の姿を思い浮かべた。定時制高校へ通い、学歴を付け、一人前の社会人になる。将来の自分の姿を思い描いた。

「夜学に通いたかったので、勤務させてほしい」

珍しく熱心に申し出た。案内書に採用された。給与は二万四千円。勤務地は新宿区淀橋支店、もちろん寮住まい。三月には、明大付属中野高校定時制への入学手続きを進めていた。仕事が多忙で、疲れてはいたが、希望が心を明るくしていた。でも、入学手続きに必要な内申書が、中学校からなかなか届かない。ぼくは焦った。映画で見たように、自分の指を切った血で手紙を書き、中学三年時の担任に催促した。必死だった。そのせいか、すぐに返事が来た。こんな時はどういう頼み方をするのか、わからなかった。それ以外の方法が思い浮かばなかった。あとで知れることだが、この時担任は、ぼくの血書を学校側に知られ、かなり迷惑したらしい。ぼくの行為を異様なものとして、恨みに思っていたのだ。後日、復讐されることになる。

ぼくの未来をも束縛しようとするれば、どうすればよいの？」

「確かに過去は消せないが、その傷が帳消しになるほど、今を、未来を、生活人としてよりよく生きるしかないね。それでよしだよ。過去の傷を超えるほどの、よい生き方をしているのに、まだ中傷する人がいるなら、その人こそが非難されるべきだよ。過去を持ち出し、きみの現在と未来を規制しようとする差別の実践者だよ。彼らをこそ、全否定せよ、だよ」

大学生が笑いながら言った。

「うん」

ぼくも笑いながら、小声でうなずいた。大学生の言葉に鈍い反応を示しながら、内心では希望が湧きあがっていた。心が躍った。学校へ行こう。未来がある。

「ここを出たら、僕の学校へ訪ねておいで。どうせ僕は留年しているよ。こんな有様だからね」

「本当にいいの？ 必ずそうします。ありがとうございます」

十月には横浜家裁横須賀支部で保護観察処分が下り、青森から母親が迎えに来た。保護観察官の紹介で、川崎市内のクリーニング店に勤務することになった。

だが三カ月もたないうちに解雇になった。店主や客に対する言葉遣いが悪かったという理由だった。少し世慣れ

仕事で先輩の車の助手席に乗ったことがある。普通は運転者と会話するのだろうが、ぼくは沈黙したまま自分の世界に籠り、景色を見ることにのめり込んだ。それ以降は、面白くないやつと言われ、外出に連れて行つてはもらえなかった。なにもせず、黙って景色を見ることができなくなったのは残念だった。

夜になると相変わらず、街をふらつき歩いた。夜の雑踏は、ぼくを孤独で少しだけ幸せな少年に戻してくれる。自分の裡に籠りながら、安心して外界を楽しむほど、心落ち着ける時間はない。

なんとか高校生になった。初めての中間試験の成績は上位だった。ぼくはいつも生まれ変わりがかった。やり直したかった。そのために頑張る。そのうち緊張の糸が解ける。失敗する。気落ちしたところへ、過去が、非行と悲惨な過去がやってくる。過去が現在を規定する。睡眠不足が続く。悩み、苦しみ、呆然自失に陥る。頭の中が真っ白になり、発作的に逃げる。苦しさから逃げ、新しく生きるために逃げる。この繰り返しだった。耐え抜いて乗り越えることができなかつた。

読書に没頭したのもこの頃だ。ドストエフスキーを特に熱心に読んだ。書物との出会いには、不思議なものがある。どこへ行くあてのない日曜日、町の小さな書店にぶらりと

入ってみた。退屈し過ぎに過ぎなかった。狭い店内の書棚を目で追った。文庫本の棚だ。真つ先に目に入ったのが、「罪と罰」、「カラマーゾフの兄弟」、手が無意識に伸びた。ポケットにその書物を買うだけの金はあった。右手に二冊の書物、左手はズボンのポケットの金の確認。ためらいもなく、レジに直進した。寮に帰ると、終日、読書に耽った。ぼくは見つけた。書物の中にぼくを。

こんなふうによく書くと、ぼくは後日、四人もの人を殺すことになるのだから、他人はぼくの裡に、ラスコーリニコフやスメルジャコフの影響を見るかも知れない。そんなことはない。殺人者が殺人者の論理に共感し、殺人者の言葉を持ったと思うのは、至極当然の成り行きだが、それは違う。言葉にならない、鬱屈した不満や苛立ち、悲惨な想いを胸の奥に仕舞い込んで、ラスコーリニコフのように町を彷徨したことは事実だ。スメルジャコフと似たような心境を生きたのも確かだ。でもやはり、ミーチャ、ドミトリーが魅力的だ。そこに描かれた次のような光景を、強固に胸の内に刻み込んで、生きていくべきだった。

そう、あの十一月の初め、燃え残りの煙を上げ、黒こげになった家の残骸が転がる村。降る綿雪は、地面に落ちては、すぐに溶け、ぬかるみとなる。誰も喜ばず、餓鬼を抱いた若い母親が呆然自失と立ち尽くし、餓鬼は泣く力もない。

へ向かった。

昭和四十三年が明けた。密航しようと、神戸からフランス貨物船に乗り込んだ。冬の海は暗く荒れていた。かすかな希望の、夢のまた夢の外国へ。できれば、タヒチへ行きたい。

それから三日目、またまた、やはり、発見された。もう死ぬしかない。小さな部屋に閉じ込められたが、すきを見つけて持っていたナイフで手首を切った。傷は深かったが、それでも、血が勝手に止まってしまった。死にきれず、結局惨めな姿をさらすことになった。タヒチは夢だった。暖かく碧い、南国の海はほんとうに夢となった。発見されてから三日目には、船は横浜へ戻っていた。

保土ヶ谷の少年鑑別所の独房に入れられた。自殺の恐れがあったためだ。それでも落ち着いた独房暮らしをするうちに、もう一度やり直そうとする意欲が出てきた。若いということは、奇妙だ。

二月には、三男の世話で、杉並区の牛乳販売店に勤務してきた。もちろん保護観察付だ。更生のために必要な制度という理由だが、むしろ邪魔になっていると思えない。新しく生まれ変わろうとする所に、必ず姿を現す無神経な保護観察官。周囲に保護観察中を知らしめるだけとしか思

そこに描かれた光景のために、あの餓鬼のために、行動し、あるいは大地にひれ伏して、静かに祈る日を迎えるべきだった。でもそんな気持ちも、まだぼくの裡で、血肉となることはなかったのだ。

販売店でも、同じことがまたやってきた。ある日ぼくは寝たばこをした。朝起きたとき、畳が焦げているのに気付いた。幸い火事にはならなかった。そう、幸い、そう思えばよかったのに。ぼくは不幸にも、畳を焦がしてしまった、たいへんな事をした、と負の感情が勝ってしまう。どうしよう。弁償だけではない。取り返しのつかない汚点、失敗を引き起したと思ってしまう。責められ、叱責され、過去の非行すべてと、今の失策が結びつけられる。そして全人格が否定され、馬鹿と言われ、頭がおかしいと言われる。そんな時、長女を想い、やはりぼくもと思う。ぼくの頭はおかしいと思ってしまう。逃げなければ、さもないと、裁判官としての世間がぼくの全人格を否定する。ぼくはまた、逃げるように店を辞めた。当然学校も退学ということになった。行くあてはない。気持ちも沈む。こんな時は、いつも海を見たくなる。ロマンチックなものではない。死ぬか、外国へ行くか。この世以外なら、どこでもよかった。船に乗ろうにも、横浜は顔が割れていると思つた。乗る前に捕まるだろう。神戸しかない。ぼくはヒッチハイクで西

えない。観察中なのがばれないかと、不安がいつもぼくの胸を重くしていた。

四月には、再度明大付属中野高校定時制に再入学もできた。なぜそんなにも学校だったのだろうか。あの大学生に勧められたこともあったが、それだけではない。他人と同じように高校生になり、友達もつくり、希望に満ちた新しい生活を始めたかった。そして、世間並みの生活と将来を望んだに過ぎない。うまくいけばいくほど、保護観察がばれないかという不安が募る。発覚すれば、希望のすべてが壊れてしまう。それを先生に言うべきか迷った。世間に隠し通すことができるか、世間の目を恐れ、打ちのめされ、おどおどして、気弱だった。でもどういふ訳か、クラス委員長に選ばれた。学校側は、ぼくにまつとうできない役割を与え、失敗させ、退学に追い込もうとしている。猜疑心から、学校側の陰険な策謀としか思えなかった。もう誰も信用できなかつた。いつも誰かがぼくを陥れようとしていた。三男に相談して、なんとか委員長の役割を降ろしてもらえるように、よい知恵を借りよう。初めて誰かに相談する気になった。追い込まれてよほど弱気だったのか、やっと他人に対峙できるようになったのか。三男を訪ねたが、出張で留守だった。肝心な時に留守にするとは、ほんとうに頼りがいのない三男だ。集団就職で、東京に初めて出てきたときもそうだった。約束を違え、ついに迎えには

来なかった。情けなさと、若干の怒りがこみあげた。朝から降り続いてきた冷たい雨は、ぼくの身体も心も濡らし尽くしていた。

夜遅く萎れて寮に帰ると、同僚が言った。

「こんな夜遅くまで、いったいどこで遊んでいたのかな」

「遊んでいた訳じゃない」

「嘘付け、お前のしていることは何でも知っているぞ」
その何でも知っているという言葉に、ぼくは驚いた。留守中に保護観察官が来たのだと了解した。そしてすべてを話したに違いない。もうだめだ。すべてが終わった。逃げるしかない。三男がいなかったために、すべてが終わってしまったではないか。道理の通らない理屈が、頭の中を駆け巡った。お前のせいだ。ぼくは逃げた。やりたくなかったけど、店の売り上げをくすねた。三万円、今まで働いた給料に見合う金だった。いいだろ、これで店とは相子だ。逃げた。ぼくはすべての持ち物を捨てて脱走した。

その後自衛隊を志願したが、保護観察中のため、入隊できなかつた。やはり保護観察は駄目なのだ。傷ある過去はぼくの未来を永遠に束縛して、再起不能にするのだ。世間中にぼくの保護観察は知られている。将来はない。思えば嫌な気持ちになる。息苦しくなる。身体が重く沈み込む。ぼくの知る狭い世間では、できる仕事はもう沖仲仕しか

降っていた。

大沼公園と雨に霞む湖、全身濡れたまま、あてもなくさま迷った。感傷的な情緒に浸ることもなかった。網走の海辺長女と波打ち際、貝殻の記憶。確かにこの世にも、唯一の憩える場所があった。でも、いまさら長女のいない網走に行ってもしかたない。わかっているながら、なぜ網走を目指すのか。考えるのも嫌だ。もうどうでもよくなった。函館港に戻るしかない。全身に重い疲労がひろがった。

実家に戻ると、またまた母親の小言が終日続いた。すべての希望がなくなつた。行き場がなかった。しかし少し落ち着くと、気持ちに余裕が出て、地元高校の定時制に通えないかと母親に頼んでみた。母は、かつての担任に頼みに行つたが、門前払いを食わされて戻ってきた。

むしろ叱責されて母は帰ってきたのだ。最初の高校入学に当たり、血書を送りつけたことを、どんな教育をしたのかと詰問されたのだ。もはや担任ではないからと、依頼は冷たく拒絶された。他人は執念深く恨みを抱き続ける。在学中のぼくの素行の暴露といい、教師というものが生徒の将来を、真剣に考えているとは思えなかつた。もう誰にも頼れない。母親から金をせびって東京に戻るしかなかった。これでだめなら、もうまっとうな社会では生きられない。やくざになるしかないと思つた。

ないと思つた。戸籍も履歴書もいらない、過去を問われない職業。なぜなら、以前就労したときに、海に落ちて溺死した同僚について、警察がいくら調べても、結局身元が不明のまま処理されたことがあつたからだ。でたらの履歴書でも雇ってもらえたのだ。面接手にあわせて、履歴書を適当に作成するほどの、生きるための強かさを、ぼくは持ち合わせてはいなかつた。もはや打つ手はない。何もかもが終わつた気がした。でも、一抹の解放感も味わつた。学校もどうでもよくなつた。朝早くから牛乳の配達をして通学し、勉強する必要もない。いまやつと、あらゆる規制から解放されたような気分になつた。

五月、久しぶりに実家へ戻つた。東京へ出てから三年が過ぎていた。板柳の駅に着いたとき、無性に人目が気になつた。できることなら誰とも顔をあわせたくなかつた。敗残兵の意識だつた。実家まで徒歩数分なのに、タクシーに乗って、身を隠して戻つた。窓外を見る余裕もなかつた。実家に着くと、母は慌てふためき、取り乱した。

終日家に閉じこもつた。母は小言を言い続けた。耐えられなくなつたぼくは、ふいに網走に行きたくなつた。長女がそこにはいないのはわかつていたが、なぜか、どうしても行きたかつた。以前のように、ふらりと汽車で青森まで出向いた。そこから青函連絡船に乗り、函館についた。雨が

六月には横浜で、ある組の沖仲仕に戻つた。ここなら本名を名乗る必要もない。住所や家族構成、職歴を問われることもない。定住社会で生きるための要請はなかつた。ここは気楽だ。ただ、体力が必要だ。いつまでも働けない。若いうちだけの職業だ。その上、ここで死んでも誰も気にしない。身元捜しなど誰もしない。仕事は米や砂糖の入つた、六十キロ程度の麻袋の運搬が主だつた。体中の筋肉が痛んだ。歩けないほどだつた。社長は常備になれと目をかけてくれたが、重労働なので生涯の仕事にはできなかつた。疲労困憊した身体を引きずつて、一日の眠りにつく場所は、やはり簡易宿泊所だつた。

当時は一泊三百円程度だつた。たまに四百円で風呂付と書かれた看板を見て、泊まってみると、風呂のシャワーから出るのは水ばかりで、お湯などまったく出ない。確かに風呂が付いていることに嘘はない。ただ、お湯の保証はされていなかった。おまけに部屋の鍵などかからない。寝ている間に財布を盗まれるかもしれない。心配でおちおち眠れない。結局、身の回り品を取めた、青いナツプザックをぶら下げ、深夜喫茶と、たまには深夜映画館を渡り歩くことになる。

映画館では、休憩所のソファがぼくのベッドだ。ナツプザックの口を締める、白い紐を腕に巻き、荷物をとられないように、用心しながら寝る。すると強面の兄貴たちに

起こされる。

「兄さん、家出か、家に帰れよ。荷物、盗まれるぞ」

「はあ」

ぼくは生返事で答え、のっそりからだを起こす。寝不足が続いた。雨のしとしと降る季節から、真夏の猛暑の季節になっていった。じっとしていても汗がふきだし、体力が消耗した。身体は限界にきていた。つい無断で仕事を休んでしまった。組の経営者はやくぎで、子分たちが大勢いた。ひどい目にあわされるかもしれない。怖くなった。荷物も給料もそのままにして、勤め先から逃げた。考えるといつもどおりの逃避だった。

日雇労働者になった。稼ぎも減った。その頃から、横浜や川崎の路上で寝るようになった。もはや帰る場所はどこにもなかった。

手配師を通して仕事をもらっても、ピンはねがひどかった。正社員が八時間労働で二千八百円貰っていたとすれば、ぼくたちは十二時間労働で二千円だった。その工場の社員たちが笑いながら言ったものだ。

「よくもそんなのでやるね」

「しかたないさ」

これがぼくたちの会話だった。

そこは紙の再生工場だった。巨大なベルトコンベアの周

囲に、梱包された古紙がうずたかく積まれていた。その頂上で古紙の梱包を切り、下にあるベルトコンベアに落とす。ベルトコンベアが、受入塔の建物三階の窓口に、その古紙を運んで行く。そこから先は、よく分からない。おそらく古紙を溶かす巨大な容器の中に落とされて、何らかの方法で溶かされるのだろう。あとは再生工程に任せることになる。

ぼく以外に高校生らしいアルバイトが二人いた。彼らと競うようにして、積まれた古紙を下のベルトコンベアに落とした。初めて楽しい職場を味わった。でもそれ以来、彼らと会うことはなくなった。また、いつもの疲れ切ったぼくに戻るしかなかった。

やはり沖仲仕に戻った。もちろん違う組下だった。やはり身体は衰弱していたようだ。昼間でも倦怠感にさいなまれ、何も考えられなくなった。ぼんやりと仕事をしていると、現場の責任者、いや監視人にひどく殴られることもあった。何もかもが、もはやどうでもよかった。

夏の終わり頃、なんとなく横須賀の米軍基地に侵入した。たばことコインを盗んだが、捕まらなかつた。怖くもなく、捕まる心配もしない、気分の変動さえない、自堕落で、気持ちの張りのない窃盗行為だ。何がどうなっても構わない。日雇い仕事とパチンコ。路上での生活。むなしく、さび

しく、心細く、独り電車の中で死んだ父と自分が重なった。路上生活の年寄り連中と話し込むのが好きだった。慰められた。父親もやはり同じような生活をしていたに違いない。切なくて、悲しくて、辛くて、胸が締め付けられた。こんなことなら、彼らと同じように、路上で寝ているうちに、静かに死んでしまった方が、あくせく苦しく生きるより、楽だろう。

九月の終わりには、身なりを整えて、集団就職した渋谷のフルーツパーラーを見に行った。知り合いの誰をも見なかった。また誰にも見られなかった。よかつたという気持ちと、少し残念で気落ちした気分が交錯した。店の誰かがぼくを認めて、復職せよと強制してくれないだろうか。そんな期待があつたのだろう。あの頃がやはり一番よかつた。でも自分からは、頼むことができなかった。網走にもはや興味はなかつたし、これでもうすべてが最後、終わりに思つた。

十月上旬、最後の米軍基地侵入となった。今度は誰かの家だった。ピストル、弾丸、ぼくと同じNと刺繍されたハンカチと、ジャックナイフを盗んだ。怖くて、うれしくて、そして安心できる友ができた。胸が高鳴った。急に自分が強くなつて、怖いものがなくなつたような気がした。それらを身に着けた自分の姿に酔つた。

三笠公園の誰もいない遊覧船乗り場、其の岸壁でピスト

ルの引き金を引いた。何発も何発も。本物と確認した。蟹が遊歩していた。発射した。確かに蟹の甲羅に穴は開いた。でも死ななかつた。二つの穴の開いた身体で、蟹は悠々と去つて行つた。蟹さえ殺せない情けないピストル。脅しに使うしかない。ぼくをいじめた者たち、肉親をはじめとして、同級生たち、その親たち、教師、保護観察官、職場の同僚、あらゆるぼくを知る者たち、ぼくにひれ伏せ。

数日後の朝、仕事がなかつたので東横線で渋谷駅へ、バスで次男の住む池袋へ出た。以前東京で、次男、三男と会食したことがあつた。その時居所を教えてもらい、一時的に居候をしたこともあつた。でもどうして次男だったのだろう。あれだけいつも殴られ、ひどい目に合つていたのに、なぜか会いに行つてしまう。でも留守だった。次男の住むアパートの部屋の鍵の隠し場所を、ぼくは知つていた。それを使って、勝手に部屋に入った。テレビを見ながら、のんびりとくつろいだ。ピストルを手にして、日活映画に出てくる俳優のように、早打ちの真似をしてひとり時間をつぶした。昼過ぎには部屋を出て、繁華街で洋服店や靴店を覗いて楽しんだ。仲間たちと一緒に楽しく遊べたら、どんなにかよかつただろう。

バスで渋谷の宮下公園で降りた。明治神宮を当てもなく

歩き、疲れたので芝生にしばらく寝ころがった。青い空に浮かぶ雲をただぼんやりと、穏やかな気持ちで眺めた。白い雲は風に吹かれて少しずつ流れていった。どこまで流れて、どこに消え去ってしまうのだろうか。あの雲に乗って、行けるところまで行ってみたい。

渋谷にはじめて住んだのは、わずか三年半前のことだ。遠くのことのように想える。

その日は祝日だったので、人通りが多かった。雑踏に流されるように、あてもなく歩いていると、生暖かい空気が顔を覆った。一瞬冷たい気流も通り過ぎるのを感じた。ひどく疲れたので、小さな喫茶店の煉瓦の壁にもたれながら、煙草を吸った。ポールモールからペリリーズに変えたところだった。品の良い軽さが好きだった。ぼんやりと佇んで行き交う人たちを眺めた。普段なら、幸福な家族連れを見ると、胸が苦しいほど寂しい気持ちになったが、その時はまったく心を揺さぶられなかった。何もかもがどうでもよかった。深い所から湧き出るような、いつもの惨めな辛い思いもなかった。ただ、大勢の人たちの、あの人とこの人の姿がぼんやりして、区別ができない。ぼくがあの人で、あの人がぼく、互いに漂い混ざるようで混ざらない、不思議な感覚だった。

そうこうする内に、目の前を行く人々が、ぼくを蔑むように見つめながら、口々につぶやいているのが聞こえた。

と思ったが、相変わらずの気弱なために、ためらってしまっただ。その刹那、誰かがぼくの名を呼んだ。気づかれた。驚いて反射的に逃げた。こんなとき、なぜか逃げてしまう。その場から逃げてしまうと、後で、かえって会いたい気持ちが強くなった。そうかといって、やはり戻ることはできなかつた。あの時戻ってれば、もしかして、いや、まさかそんなこと、と悔やむ。

虚脱感が全身を覆った。体を引きずるように、力なく、当てもなく、渋谷界隈を流離った。どれくらい時間が経過したのかまったく気が付かなかつた。でも身体は正直で、空腹感が襲ってきた。休憩もしたくなり、見つけた蕎麦屋に入った。フルーツパーラーの同僚で、蕎麦を食って、呼吸困難で救急車で運ばれた奴がいたことを思いだした。蕎麦アレルギーで、生涯蕎麦を食べない気の毒なあいつは、今どうしているのだろうか。やはりあの店が一番だったように思う。あの店でうまくやれたなら、こんなことにはならなかつた。

店を出たときは、すでに外は暗くなっていた。あまりに疲れたので、横浜へ帰りたくなつた。心細くなると、食べにおかなければ、と思う。疲れると、安心できる場所へ帰りたくなる。路上でもどこでもいいから、ゆっくり眠りたくなつた。でも、せつかく心強いピストルがポケットにあるのに、何もせずにこのまま帰るのは、何かやり残した気

「何もかもわかつている。お前の出生から経歴まで、何もかもだ。お前が何を考えているのか、見え見えだよ」

そう言って、それぞれが詰め寄ってくる。ぼくは他人の目に晒され、恥辱、屈辱のすべてが見透かされている。侮蔑と非難が襲いかかつてきた。不気味さと恐ろしさに耐えられなくなり、思わずポケットの中を探り、冷たい秘密の友達を確認した。そつと撫でていると、安心感が拡がった。掌に感じるこの冷たい感触が心地よかつた。いつまでも触り続けた。こいつに支えられていれば、一人でもやっていける。どんな侮蔑にも耐えられる。心強さが湧き上がってきた。こんな気持ちは、以前にも感じた記憶がある。父親の血が染みついた木刀、そう、それ以来だった。

駅前のフルーツパーラーを、もう一度のぞいてみる気になつた。知り合いがいるとすれば、ここしかない。先日、来たばかりなのに。いくら強がっても、やはり寂しかったのだ。あるいは、ここならもう一度やり直せると思つたのだろう。いずれにせよ、もうどこへも行くあてがなかつた。この曇り空の下で、ぼくは途方に暮れていた。

離れたところから店を覗いてみた。かつての同僚たちの姿が見えた。懐かしさで胸がいつぱいになった。すがりた いほどの悲しみと気弱さが、ぼくの胸を締め付けた。誰もが店頭で客の相手をしている。よほど声をかけてみようか

分で、もう少し東京にしようという気になつた。

バスで六本木へ向かつた。いかれた金持ちのお坊ちゃんたちがたむろしているに違いない。来るなら来い。いつでもピストルで相手してやる。でも、ほんとうに喧嘩になつても、このピストルでは、相手は死なないだろう。こんな小さな物で人を殺せるはずがない。蟹の甲羅を貫通するのが関の山だ。脅すだけの代物に過ぎない。危険に自ら乗り込むような昂揚した気持ちで、六本木をぶらついたが、人が気がほとんどなかつた。当然いきがった連中の姿もなかつた。少々気落ちして、せつかくの覚悟も無駄に終わった。

むなししい気持ちで夜空を見上げると、闇を背景にして、東京タワーが浮かんでいた。引き込まれるようにして、疲れた身体を引きずった。何気なく視線を横にやると、ベンチがあつた。ここがいい。横になつた。雨が降つたのだろうか、ベンチは少しばかり湿っていた。雨と埃の混ざつた匂いがした。そして、そのまま眠ってしまった。どれくらいの間寝ていたのか、まったくわからない。目覚めると周囲には誰もいない。沈黙の底にいるようだった。外灯の明かりだけがわずかに点灯していた。じつとしているとあまりに寒いので、歩いて温めることにした。萎れて惨めなぼくが重い足を運ぶ。

東京に出て、生活が落ち着いた頃、東京タワーに昇った。文字通り、おのぼりさんだった。東京はほんとうに広い。どこまでも密集した家並みが続いていた。東京プリンスホテルのプールは、映画で見る遠い南の海の色だった。いまだに外国へは行けないが、やはりあの紺碧の海の色は忘れられない。ほんとうの海の代わりに、プールの水で我慢しよう。夜の照明を反射して、きらびやかだろう。

疲れていたが、最後の力を振り絞るようにして、フェンスを越え、ホテル内に飛び降りた。衣服の前面がフェンスで擦れ、痛んだのが気になった。今日はここで寝るしかない。誰にも見つからず、ゆっくり休める、心地よい場所を探そうと思った。あのバス駐車場のような。その時、大きな足音が聞こえた。急にまぶしい光がぼくの顔を照らした。一瞬目がくらんだ。その光を手で遮り、指の間から目を細めて覗くと、大きな黒い影が見えた。その影がぼくに近寄ってきた。また警察官だと思った。どうしてぼくを追いかけては、捉まえるのだろうか。いつもぼくの邪魔ばかりする。「何をしている」

「何もしていない」

「こっちへ来るんだ」

背を向けて逃げようとしたが、襟首をつかまれ、強い力で引つ張られたので、ぼくは尻もちをついた。ピストルがポケットからこぼれ落ちた。狼狽した。逃げないと。ピス

トルを拾い、振り返って撃った。何発も撃った。倒れない。どうなっているのだろうか。やはり、こんなピストルでは人を倒せない。何の効果もない落胆と、倒れない不気味さからぼくは逃げた。記憶をなくすくらい動転し、逃げた。警官はいつも二人組だ。もう一方が来るまでに逃げないと。とにかく逃げないと。追手が気になって、振り返った。大きな黒い影は、仰向けにゆっくりと倒れていった。

了

参考文献

- ① 「涙の射殺魔・永山則夫事件」 新風舎文庫 朝倉喬司
- ② 「無知の涙」 河出文庫 永山則夫
- ③ 「永山則夫 封印された鑑定記録」 岩波書店 堀川恵子
- ④ 「永山則夫 聞こえなかつた言葉」 日本評論社 薬師寺幸三
- ⑤ 「まなざしの地獄」 河出書房新社 見田宗介
- ⑥ 「戸籍がつくる差別」 現代書店 佐藤文明
- ⑦ 「木橋」 河出文庫 永山則夫
- ⑧ インターネット「無限回廊」他